
ながされて藍蘭島～もう一人の漂流者～

カイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ながされて藍蘭島〜もう一人の漂流者〜

【Nコード】

N4635W

【作者名】

カイナ

【あらすじ】

IQ150オーバーの天才児、相沢総一。それゆえに自らを持て余しており面白い事、所謂わくわくを探していた彼は同じ船に乗っていた少年、東方院行人を助けるため船を飛び降り不覚にも共に漂流の身となってしまう。そして嵐に巻き込まれた後二人は女性しか住んでいない島、藍蘭島へと流れ着く。

第一話 船、転落、漂流……

「……退屈だ」

海の上を航行しているとある船の上。汽笛がボォーッと音を立てているのを聞きながら甲板に座っている少年 茶色い髪を長めに伸ばしている はそうぼそりと呟いていた。ちなみに今日は平日の時間は午前十時で少年はどこから見ても中学生、完全に授業をサボッっているしかない状態だ。

「ザマーミロー、クソ親父ー！！ ボクは今自由なんだー！！」

「ん？……」

すると突然そんな声が聞こえ、少年はそっちの方を向く。そこには黒い髪の少年 茶髪の少年と同年くらいだろう がひゃっほーと言わんばかりの勢いでその声を上げている光景があった。

「家出か？……ま、いいか……沖縄ではなんかわくわくする事、見つけられっかな……」

茶髪の少年はそう呟いて前を向き、ふと空を見上げる。雲一つない快晴だ。

「わ、わあっ！？」

すると突然そんな声が聞こえ、バシャンツと何か変な音が聞こえる。

「！？」

その音を聞いた少年は驚いたように音の方を見る。そっちはさつき叫んでいた家出黒髪少年がいた方向、だがその姿はない。そしてさつきの妙な着水音らしき音……

「まさか!？」

少年は慌てて立ち上がると音の方に走り、海を見下ろす。そこには誤って転落したのかばしゃばしゃともがいている黒髪少年の姿があった。それを確認した茶髪の少年は大急ぎで辺りを見回すが周りに人はいないし誰かを呼びに行っている暇はない、そう判断した瞬間彼は自分の後ろの壁にかけられていた浮き輪を二つ取るとほぼ衝動とでも言おうか、反射的に海に飛び込んでいた。

「大丈夫か!？」

「あ、うん……あ、ありがとう……」

茶髪少年の言葉に黒髪少年は頷いてそう言つと渡された浮き輪を受け取り、なんとも言えない微妙な表情を見せる。

「どうした？」

「いや……」

それに気づいた茶髪少年が首を傾げると黒髪少年は苦笑しながら前方　つまり茶髪少年から見れば後方　を指差し、茶髪少年は振り向くとその表情を固めた。船は二人が海に落ちていることに気づかず、汽笛を鳴らしながらゆっくりと二人から離れていつている。

「し、しまった……」

「浮き輪だけ投げて船員さんに知らせてくれてもよかったのに……」

「悪い、咄嗟の事でつい……」

「ま、まあ、過ぎちゃった事はしょうがないよ。それだけ早く助けようとしてくれたんだし」

茶髪少年が声を絞り出すと黒髪少年がそう返し、茶髪少年が本当にすまなそうにそう言っていると黒髪少年は苦笑交じりにそう返す。しかし船が戻ってくるわけもなくゆっくりと去っていく。すると茶髪の少年が背負っていた鞆からロープを取り出した。

「とりあえず、浮き輪を繋げておこう。これではぐれでもしたら本当に洒落にならない」

「あ、そうだね……というかなんでロープなんて持ってるの？」

「まあ、な」

茶髪少年はそう言いながら手際よく二つの浮き輪をロープで縛り繋げる。それを見た黒髪少年が尋ねると茶髪少年は目を瞑って静かにそう返す、すぐに二つの浮き輪はロープで繋がった。

「手際いいね……あ、そういえば君の名前は？　ボクは東方院行人」

「……相沢総一」

黒髪少年　東方院行人が名乗ると茶髪少年　相沢総一も自らの

名を名乗る。そして二人の少年の漂流生活が始まる事となった。

それから波に流されるまま行人は浮き輪に掴まりながら漫画を読み、総一は何かの小説を読んでいる。すると行人はあため息をついて漫画を閉じ、海水に着水しないよう気をつけながら鞆に戻すと口を開いた。

「あの、総一君？」

「……総一でいい。どうした？」

行人の言葉に総一は小説に目をやったまま静かに返し、尋ね返す。それに行人は苦笑しながら頬をかき、声を出す。

「あ、えつと、人の事言える立場じゃないけど、総一はなんで平日のあんな時間に船に乗ってたのかわかって思ってたさ。言いたくなら別にいいんだけど……」

「別に言いたくないわけでもないが、行人はどうなんだ？ お前が言えば俺も言うが？」

行人の問いに総一は小説の後書きをパラパラッと流し読みして閉じ、鞆に戻して行人の方を見ながら淡々とそう返す。それに行人は少し黙って何かを考えるような仕草を見せると改めて口を開いた。

「この前親父と喧嘩してさ、勢いで家を飛び出したんだよ。学校の勉強やら何やらでストレス溜まってたのもそれに拍車がかかったのかな？ で、折角だから前からしたかった船旅をしてただけだよつとはしゃぎすぎちゃって……」

「船から落ちて今この状況ってわけか」

行人がそう自分の家出理由を説明し、最後に情けなさそうに笑いながら言う「総一も静かにそう返す。そして「次は俺の番か」と呟くと彼もまた考えるような表情を見せた。

「あ、言いたくないなら本当にいいんだよ？」

「そういうわけじゃない。ただ何を言えればいいか……行人、メモ帳とペンが何か持ってるか？」

「え？ あ、うん」

それに気づいた行人が気を使うようにそう言うが総一は難しい表情でそう呟き、行人に尋ねる。その内容に行人は頷くと鞆の中からノートと鉛筆を取り出した。それを確認してから総一が口を開く。

「俺に見えないよう適当に三桁×三桁の計算をしてみてくれ。計算間違えるなよ？ で、計算終わったらその式を教えてくれ、例えば
1 2 3 × 4 5 6 のように」

「あ、うん……じゃあえっと……出来た。7 6 8 × 5 9 7 は？」

「4 5 8 4 9 6」

「！？ じゃ、じゃあ……9 7 8 × 7 5 2 は？」

「7 3 5 4 5 6」

「嘘！？ じゃ、じゃあ前提から外れるけど……きゅっ、9 8
7 5 ÷ 5 4 は！？」

「182・8703703、以下省略するが703が繰り返されるはずだ」

「……」

総一の言葉に行人は啞然とする。自分がノートに書き込んで時間をかけ、ようやく計算できた式を総一は一瞬で暗算してのけている、しかも割り算に至っては無限小数の法則まで言い当てていた。それに総一は肩をすくめる。

「この通り、俺にとって三桁以下の掛け算と四桁以下の割り算は九の延長みたいなもの。子供の頃医者先生の先生に調べられた結果、俺はIQ150オーバーらしいんだ」

「ひゃつ、150!？」

総一の言葉に行人はまた声を上げる。一般人のIQは100前後で東大生の平均IQは120、目の前の少年はそれを超えているというのだ。

「まあ昔から幼稚園に入る前に平仮名片仮名は覚えてし小学校の頃に余程難しい漢字さえなければ新聞も読めた。ただこの異常な学力のせいで友達は出来ないし教師にも厄介者扱いされていた、中学校の頃は筆箱や靴隠すとか古典的且つ陰険な苛めもあったな」

「ひゃー、頭がよすぎるのも大変なんだね……」

「出る杭は打たれる、というやつだ。まあ一応肉体的な苛めに対する護身として昔から抜刀術を習ったな。だが学校でやる事は分かり

きつててわくわく出来なかった、だから結局テストの時以外ほぼ不登校だったよ」

総一のため息交じりの言葉に行人が驚いたように言う。総一は静かに返し、肩をすくめてそう続ける。それに行人は目を細めた。

「……親から何か言われなかった？」

「父さんも母さんも大らかというか放任主義というか。俺が困らないならまあいいんじゃない？ 的なノリだったから。俺もたまに暇に合わせて旅行とかもしてたよ、自費で」

「自費！？」

「ああ。日雇いのバイトって嘘ついても意外とばれないものだな、14なのに結構あっさり雇ってもらえる」

「駄目だよそんなの！？ っていうか同い年！？」

行人の言葉に総一はまた肩をすくめてそう返す。そして悪い笑みを見せながらの言葉に行人はツツコンだ後気づいたように続ける。それに総一が目を細めると行人はあつと声を出した。

「う、ごめん。なんか大人びて見えるからつい年上かと……」

「気にしないでいい、年の割りにしつかりものって昔から言われている。で、今回は沖縄で何かわくわくを探そうと思ってたんだが、このアクシデントだ」

「う、ごめん……」

「まあいいさ。人生万事塞翁が馬、ガキの言葉じゃないが人生は一体何が起きるか分からないからわくわくするんだからな。ある意味人生が最大のわくわくだ」

総一の言葉に行人はまた謝るが当の本人は気にする様子もなくさうとそう言い、くつくつと笑う。それに行人は笑顔を浮かべた。

「ポジティブだね。こんな海の真ん中に放り込まれて、死んだりしないかとか考えないの？」

「ま、最悪死ぬかもなとは思ってるが、死んだらわくわく出来ないわくわく出来る事を探すためにも死ぬわけにはいかない。お前もせっかく家出を決意して家を飛び出したんだ、すぐ死ぬのだけは避けたいはずだろう？」

「まあね」

「そういうことだ」

総一の言葉に行人が笑ってそう言うとき総一もまた一つ微笑を浮かべ、話は終わりだというように空を見上げた。
事件は、それから五日後だった……。

「わあああああつ！！！！」

「声だすな、舌嚙むぞ。おわあつ！？」

未だ二人が漂流している海は突然大荒れになってしまい、荒れ狂う波に二人は翻弄され行人は悲鳴を上げている中でも総一は冷静にそ

う言っていたが流石に波が身体を覆いかぶさると若干悲鳴らしき声を上げていた。

「げほっげほっ、無事か、げほっ、行人？」

「な、なんとか……というかこれじゃマジで死ぬかも……」

総一は海水を飲んだのか咳き込みながら行人に無事かを尋ね、彼も顔についた海水を払いのけながら頷く。すると今度は二人の後ろからゴゴゴゴゴという音が聞こえてきた。

「……この音って、まさか……」

「ははは、わくわくするな……」

行人の言葉に総一は自嘲気味に笑いながら返し、二人は同時に後ろを振り向く。そこには二人の数倍の高さがあるだろう大波が二人を呑み込もうとばかりに向かってきていた。

「「ぎゃあああああああ！！！」」

そしてその悲鳴の直後、二人は波に呑み込まれ海中をもがきながら意識を失った。

「ふんっふふっふふっんっ」

本日は晴天なり。ここはとある島、その海岸にとび色の長い髪をポニーテールにした可愛い少女が釣竿を持ってやってきていた。その足元では丸っこい子豚らしき生き物がぴょんぴょん跳ね回りながら少女を追いかけていた。そして少女は海岸にある崖の端っこに立つ

と手に持っていた釣竿を構え、大きく振りかぶる。

「せーのー……それっ!!」

そして釣竿を思いっきり振り、釣り糸と繋がっている釣り針は沖まで飛んでいくと着水、プカッと浮きが浮かんだのを確認すると少女は崖に腰掛けて隣の子豚に笑顔を見せた。

「待っててねーとんかつ、今おいっしいごちそう釣ったげるからね？」

「ぷー」

「昨日は嵐だったし、きつとすっごいのが……」

少女が子豚 とんかつにそう言っている間に竿に手応えがあり、それを感じ取った少女は釣竿を持って立ち上がった。

「やった! さっそくあたりい!!」

そう言っつて竿を持ち上げるがその時海中から姿を現したのは黒髪の少年 行人。

「えっ!?!」

それを見た瞬間少女は固まり、その相手が人間である事を認識すると表情を固める。

「ど、どうしょーっ! 人が釣れちゃったよー!!」

そして行人を釣り上げて崖の上まで持つてきて寝かせるとあたふたと慌てたようにそうパニックのような声を上げ始めた。

一方そこから少し離れた海岸。総一はそこに流れ着いていた。すると彼の方はすぐに目を覚まし、ゆっくりと起き上がった。

「つつ、う……ここは？……」

総一は起き上がって少し辺りをきょろきょろと見回す。しかし辺りに人気はなく、総一は砂浜に目をやった。

「足跡や人がいた痕跡はないから少なくとも行人が先に目を覚ましてどこかに行った可能性はない……となると、まさか……」

総一は冷静にそう判断すると一つの可能性に思い当たり、海に目をやる。もしかしたら行人は波に攫われたまま、最悪溺れているかもしれないという可能性に。

「……」

その結論に至ると総一は一旦海岸から上がって鞆を置き、念のため砂で軽く隠しておく。この近くに、いや、この島に誰か人間がいるという保障はない、それを探すのに手間取っていたら手遅れになる可能性の方が高い。

「この辺の海流は分からないが、とにかく体力が続く限りこの辺を泳いでみるか……」

総一はそう言うのと軽く柔軟体操を行い、海に向かって走り出そうと地面を蹴ろうとした瞬間

「あんた、何してんだい!？」

「!？」

不意に後ろから声をかけられ、総一はビクンと驚いたように足を止めると振り向く。そこには赤いロングヘアを後ろでくくり、アホ毛の立っている少女と青い髪をショートボブにした少女が驚いた様子で立っていた。

「ひ、と?……よかった、無人島ではないようだ……」

総一は安心したようにそう呟くがその一瞬で気が緩んでしまったのかぐくんと膝をついてしまい、そのまま意識を失う。

「ちょ、ちょっとあんた、どうしたんだい!?!……ちかげ、とりあえずオババのところに運ぶよ!」

「は、はい!」

赤いロングヘアの少女は慌てて総一を揺り起こそうとするが彼が全く反応しないのを確認すると横の少女　ちかげにそう言う。それにちかげが頷くと赤髪の少女は総一を背負って歩き出し、ちかげもその後を追おうと歩き出そうとするとふと砂に隠れていた総一の鞆に気づき、それを砂の中から取り出す。

「これは……」

「ちかげー!　早くついてきなー!」

「あ、はい！…（…後でゆつくり調べてみましょうか。ウフフフ）」

ちかげはその見慣れない鞆を不思議そうに見るが赤髪の少女の呼び声を聞くと鞆を持って彼女の後を追って走り出す。その顔には怪しい笑みが浮かんでいた。

「まったく、助けるつもりでトドメさしてどうする？　ちゃんと教えてたじやろうが」

「いやー、しつぱいしつぱい」

一方とある家の中、行人はその布団に寝かされており、その横に座っているお婆さんが行人を釣り上げた少女に説教を行うと少女はにやはたと笑いながらそう返す。

「ん？　どうしたんだいこの騒ぎ？」

「あ、りんちゃんの声だ」

「また集まってきおったか」

すると突然そんな声が聞こえ、少女が声を出すとお婆さんはやれやれと息を吐きながらそう呟く。そして赤髪の少女　りんともう一人　ちかげが家に入ってきた。

「オババ、海岸で見覚えのない奴が倒れたんだ！」

「え！？　また！？」

「また？……つてもう一人！？」

「とりあえず。まず、もう一枚布団を出すんじゃ」

「あ、うん」

りんの言葉に少女　　さすが驚いたように言うとりんは最初首を傾げるが布団にもう一人見覚えのない者がいるのに気づいて驚いたように声を出す。するとオババはそう指示し、まずは頷くと布団をもう一枚敷き、そこに総一は寝かせられた。

「それにしても、なんかみんな集まっちゃったね」

「まあ無理もなかるう。この島に”外”の人間が来たのは初めてじやからのう。しかも二人とは」

「それにしてもこの方達、体つきが私達と大分違いますわね。どうしてでしょう？」

「それはのう、こやつらは……」

まずはもの珍しそうに家の周りに集まっている島民達を見ながらそう呟き、それにオババはうんうんと頷く。するとちかげが眠っている二人を見ながら首を傾げ、不思議そうにそう呟く。それにオババは目を閉じて言い、言葉を溜めると目を開いた。

「男、だからじゃよ」

『男オ！？』

その言葉の直後家の周りに集まっていた島民全員が家に入って行人と総一を見る。

「お前ら勝手に人んちに入るなー！ とつとと仕事に戻れーい！！」

それにオババは激怒したか思いつきり彼女らを怒鳴りつける、その間ずずは行人をじっと見ていた。

「ん……胸が重い……金縛り？……」

「あつ」

すると行人が目を開き、彼の胸の上に座っている子豚 とんかつを見ると不思議そうな表情を見せる。それを見るとずずは輝いた笑顔で行人の顔を覗きこんだ。

「気がついたんだあ！ よかったあつ！」

「え？ あの……君は？……」

ずずの言葉に行人はぼんやりと彼女を見るが直後顔を真っ赤にして布団から飛び出てまるで距離を取るように後ずさる、と縁側から外に落っこちた。

「わ、だ、大丈夫……じゃないか……ふえーん、目を覚ましてー！！」

ずずは行人が気絶してるのを見るとそう叫びながら彼を揺さぶる。

「ど、どうしたんだ？……」

「う、くっ……」

「あ」

それをりんが不思議そうな表情で見ていると今度は総一が唸り、総一の私物である小説を読んでいるちかげが声を出すと総一はゆっくりと目を開けた。

「ここは？ 俺は確か海岸で……」

「ああ、目が覚めたかい」

「よかったですね」

「……あんたらは？」

総一が起き上がって辺りを見回しているとりんとちかげが声をかけ、その姿を見た総一が首を傾げながら問うとりんは少し笑って口を開いた。

「覚えてなくっても無理はないかな。あたいはりん、海岸で倒れたあんたをここまで運んだんだ」

「そうか、そりゃ助かった。ところで俺と同じ年の男を見かけなかったか？」

「ああ、それならあちらで気絶してます」

りんが名前を名乗り、そう説明すると総一はぺこりと礼をし、それを聞いたちかげは縁側の方を指し総一もそっちを見る。そこには未

だ気絶している行人とうにやあゝんと泣きながら彼を揺り起こしているすずの姿があった。

「何があつたんだ？ えーっと……」

「申し遅れました。私はちかげと言います、よろしくね。あなたのお名前は？」

「ああ、助けてもらつたという名を名乗らないのも失礼か。俺の名は総一」

首を傾げてそう呟いた後総一はちかげを見て首を傾げ、それにちかげは自らの名を名乗った後総一に名前を尋ねる。それに総一はまだ自分が名前を名乗っていない事に気づき、自分の名を名乗る。

それから行人も目が覚め、二人はオババに用意された食事を食べていた。ちなみに何故かすずもご相伴に預かっている。

「でもすごいねー、一週間も飲まず食わずで漂流してたなんて」

「うん、我ながらよく生きてたと思うよ。あ、お代わりお願いします」

「ああ。二人とも生きててラッキーだったな」

すずがご飯を食べながらそう言うところでも行人もご飯を食べながら頷き、総一は味噌汁をすすりながら続ける。そして行人が安堵の表情でまた口を開く。

「それにしても、かなり流されたと思ってたけど日本に流れ着いたのは不幸中の幸いだよね」

「へ？」

「へ？ って、どうした？ ここは日本じゃないのか？」

行人の言葉にすすが呆けた声を出すと総一が沢庵を齧りながら尋ね、それに対しすすは両手を挙げて肩をすくめるような仕草をした。

「確かにここに住んでるのは日本人だけど、この島がドコにあるのかはわからないよ？」

「え？」

「どういう事だ？」

「それはの、ワシらもおぬしらと同じ流れ着いたものだからじゃよ」

「「え！？」」

すすの言葉に行人が驚いたような声を出し、総一が続けるとオババが説明、それに二人はまた驚いたような声を出した。

「今から丁度130年前、日本開国後ワシらは最新の衣・食・住の技術と医学を学びに欧羅巴ヨーロッパに渡ったんじゃ。しかしその帰りに大嵐にあつて船が沈んでしまったの。たまたま目の前にあつた無人島……つまりこの島にたどり着いたんじゃよ。まあ幸いにも住みやすそうな島じゃったし、沈んだ船の名前を取って”藍蘭島”と名づけ、そのまま居ついてしまった……というわけじゃ」

「へえー」

「なるほど」

「それ以来ワシらは外界とはまるっきり接触がなくての。おぬしらの格好から察するに日本も大分様変わりしたようじゃのう」

オババの説明を聞いた二人が頷いているとオババは行人の服を調べながらそう言い、それを聞いた総一はふつと笑った。

「それにしても、明治辺りから文明が変わらない島があるとは驚きだな。少し興味深い」

「ん？……ってことは、ここには島を行き来する定期船とかないんだよね？」

「うん」

総一の言葉を聞いていた行人がふと尋ねるとすずはあっさり頷き、行人は自分の鞆から携帯を取り出した。

「電話とか外に連絡する手段もない……よね？ やっぱ携帯も県外だし……」

「でんわ？ なにそれ？」

その言葉に今度はすずはきょとした表情でうにや？と首を傾げる。そして行人は汗をたらたら流しながら自分と総一を指差し、口を開いた。

「つまり、ボク達はこの島から出られない……ってこと？」
「ご馳走様」

行人が汗をだらだら流しているのに対し総一は焦る事無く食事を食べ終え、パンと両手を合わせて挨拶する。それに合わせたようにすずはにっこり笑顔を浮かべた。

「そついう事になるかな、多分」

「うつそおー!?」

そしてすずは満面の笑顔でのきっぱりとした言葉を聞いた行人はそう大声を上げていた。

それから場所は海岸に移動する。行人は自分の鞆を背負うとすず達の方を向いた。

「悪いね、小船貰っちゃって。食料も」

「いいけど、ホントに島から出るつもり?」

「ちと無茶かもしれないけど、一応天測できるしなんとかなるよ。それより総一は一緒に行かないの?」

行人の言葉にすずがそう尋ねると彼はそう返し、ここに漂着してきてもう一人の少年　総一に尋ねるが彼は腕組みをして口を開いた。

「せっかくだ、この島でわくわくを探してからでも遅くはない。わくわくが見つからなかったらその時に帰るようにするさ」

「そう、じゃあまたね。じゃ、お世話になりました!　さよーならー!」

行人はそう言いながら海へと漕ぎ出していく。

「オババ、言つとかなくていいのかな？ この島に住む事になった
もう一つの理由……」

「ん、まだ理由があるのか？」

「うん。この島の周りは」

「ぎゃあー！！！」

すずの言葉に総一が尋ねるとすずが頷いて説明を始めようとするが
それを遮る勢いで行人の悲鳴が聞こえ、総一は海の方を見る。する
と行人の乗っているボートが渦に巻き込まれている光景があった。

「なっ！？」

「この島の周りは激流の渦に囲まれていて、ごくまれに嵐の日とか
に入ることばだけんど決して外に出ることができないんだ」

「…… 同行しないで助かった」

総一が驚いたように口を開けるとすずが説明、それを聞いた総一は
息を吐きながらそう呟き行人が再度こっちに流されてくるのを見る
と踵を返した。

「総一君、どうするの？」

「総一でいい。俺を助けてくれた二人に改めて礼を言つとこうかと思
つてな、悪いが家の場所を教えてくれないか？ それさえ分かれば
自分でどうにかする」

「あ、うん。えっと、りんちゃんの家はここから……」

すずの問いに総一は訂正を入れた後そう返し、次にすずに尋ねる。
それにすずはうんと頷くと総一を運んできた二人　りとちかげ
の家の場所を教え始めた。

「分かった。ありがとな」

「あ、泊まる場所はどつするの？　よかつたら私の家に　」

「初めて会つた相手にそこまで厄介になるわけにはいけない、どこ
かで野宿でもするさ。じゃあまた明日にでも」

すずの提案に総一はゆつくりと首を横に振つてそう返し、歩き出し
た。そして森の中を歩きながらふと一人こちる。

「例えるならば時代が止ま^{とき}つた島、藍蘭島か……ここなら、わくわ
くを見つけれそうだな」

そう呟くと総一はくつくつと笑い、さつきすずに教えられた二人の
家に向けて歩き出す。

この少年　相沢総一と、結局帰れなくなりこの島で暮らす事を決
心した少年　東方院行人。これからこの島でムチャクチャな毎日
を送る事になるなんて、二人は全く思っていなかっただろう。

第一話 船、転落、漂流……（後書き）

初めましての方は初めまして、カイナと申します。最近ながされて
藍蘭島に興味を持ち、なんか書き始めちゃいました。興味とノリか
ら書き出した上にオリキャラの総一のこれからを始めヒロインとか
もさあどうしようという手探り状態だったりしますがまあ、未永く
お付き合いいただければ幸いです。それでは。

第二話　ながされたのち追われて、衝撃の事実

ここは藍蘭島という島。ここに流れ着いた少年　相沢総一は自分を助けてくれた少女にお礼を言いに彼女らの家へと向かっていた。そして彼は一軒の家の前に立つと口元に手をやる。

「ここ、か？……」

彼はそう呟くととりあえず戸の前に立ってコンコンとノックする。当たっていればそれでいいし、違ったら違ったで彼女らの家の場所を改めて聞けばいい話だ。そう考えていると戸ががらりと音を立てて開く。

「はいよ、つと！？」

「よお」

出てきたのは赤い髪を伸ばし、後ろで縛っている少女　りん。彼女はざつくばらんな口調で出てくるが総一の姿を見ると驚いたように後ずさり、その反応に総一は不思議そうに目を細めながらとりあえず挨拶する。

「あ、あんたか！？　な、何か用かい！？」

「いや、改めて礼をと思ってな。助けてくれてありがとうよ」

「あ、あ、ああ、い、いや気にすんなって！　そうそう、改めて名乗っとくよ。あたいはりん、この島で大工やってんだ。ダンナはこの島に住むのかい？」

「ああ、帰れそうにないからな。それにここならわくわく探しも出来そうだ」

りんのどこかきょどりながらの言葉に総一は焦りを欠片も見せずに礼を言い、それにりんはまたどこかきょどりながら言うが自分の名前を名乗ると落ち着いたようにそう続け、それを聞いた総一は軽く虚空を見上げて肩をすくめながら返した後微笑を浮かべながら続ける。

「わくわく？……まあいいや。ここ、家でも家具でもなんでも作るから何か必要なものがあつたら言ってくれよ」

「そうか、だが今は大丈夫……いや、そういえば、あれ船に置きっぱなしだったな……りん」

総一の言葉　わくわく　にりんは首を傾げるがまあいつかと完結するとそう自分の家の説明をし、それを聞いた総一はそう言うがふと思いついたように口元に手をあて呟くとりんを呼ぶ。

「はいっ!？」

「一つ作ってほしいものがあるんだが、いいか？」

「あ、ああ……なんだい？」

突然呼ばれたのにりんはびくつとなつたように返し、総一は静かにそう尋ねる。それにりんが頷くと総一は作ってもらいたいものを説明、それを聞いたりんはふうんと頷いた。

「なるほどね……」

「出来るか？」

りんの言葉に総一が尋ねるとりんはうつと唸る。

「へえ、面白そうじゃないか」

「！？」

すると突然そんな声が聞こえ、総一は思わずそっちの方を向きながら右手を左腰へとやろうとするが思い出したようにその手を止める。そこに立っていたのはりんと同じ色の髪をした女性だ。

「……あんたは？」

「あたいはりさ、りんの母親だよ。あんたが島に流れ着いた男の片割れかい？ 結構いい男じゃないか」

「そりゃご丁寧にどうも、社交辞令として受け取っておきますよ。お若いお母上殿」

「はっはっは。にしてもあんた結構面白いものをお願いするね、この島じゃあんまり必要ないと思うけどさ」

「ないと落ち着かないんでね。いざという時の護身にもなるし」

総一が心なしか睨みながら尋ねると女性　りさは自らの名を名乗り、くつくつと笑いながらそう続けると総一は肩をすくめて返し、それからりさが言っていると総一もまたくつくつと笑って返す。それにり

さはよしと頷いた。

「よし、作ってやるよ。今んとこ注文もあんまりないし、まあ一日で出来るだろ」

「そうか、すまない……ところで、支払いはどうすれば？」

りさの言葉に総一はぺこりと頭を下げ、思い出したように尋ねるとりさははっはつと笑う。

「別にいいさ、初めての相手だしね。さあびすしといてやるよ」

「それはありがたい。じゃあ、俺はもう一人の……ちかげつつたっけ？ その人の方にも挨拶に行くから。よろしく頼む」

「あ、ああ。楽しみに待つてな！ あたいにドーンと任せとけ！」

りさの言葉に総一は僅かに笑みを浮かべて返した後そう言い、もう一つ礼をすると走り出す。その後ろ姿を見ながらりんはそう叫び、総一が走り去っていくのを見るとほおつと息をついた。

「なんだいりん、あいつに惚れたかい？」

「なっ、ななな何をつ！？」

それを見たりさの言葉にりんは顔を真っ赤に染めながらそう叫び声を上げており、それを見ながらりさはくっくつと笑いを零していた。

そんな話が行われている間に総一はちかげの家の方に走っており、彼女の家の前に辿り着くとふうと息を吐いて僅かに浮き出していた額

の汗を拭う。

「村はずれとはな……流石に少し疲れた」

彼はそう呟きながらコンコンと扉をノックする。するとどたどたという足音が家の中から聞こえ、次の瞬間勢いよく扉が開く、が総一は素早くバックステップを踏んで扉の直撃をかわしながら口を開いた。

「突然すみません、ちかげさん……」

しかし次の瞬間総一の口が止まる。彼の前には二足歩行をしているピンク色の象がエプロンを着て立っている、そんな彼にとっての今までの常識から考えると明らかな異常な風景を目の前にすれば流石の彼と言えどフリーズしてしまうのはむしろ必然といえるだろう。

「パオ？」

「……あ、ああ、失礼。えと、ち、ちかげさんはいますか？」

ゾウが首を傾げると総一は我に返り、そう尋ねる。それを聞いたゾウはああと頷いて拍手を叩くような動作をすると少し待ってくださーいといったげなポーズを取った後家の中に入っていった。

「な、なんでゾウが二足歩行で歩いているんだ？……」

それを見届けてようやく総一はそう疑問の声を呟く。それから一分ほどするとまた足音が聞こえ、青い髪をショートボブにした少女ちかげが姿を現す。

「あら、総一さんでしたか。こんにちは」

「ども。さっき助けてくれたお礼をと思って、ありがとう」

「いえ、私はりんちゃんの後についていただけだから。気にしないでほしいですの」

ちかげが柔和に微笑みながらそう挨拶すると総一も軽く会釈をして
そう返した後ぺこりと頭を下げる。それにちかげはむしろ恥ずかし
そうに笑いながら手を振って返し、総一も僅かに笑みを浮かべる。
そしてさっきの光景を思い出した。

「そういえば、ゾウを見たんだが……」

「ああ、ぱな子さんですか？ 彼女はここの家政婦ですわ。島一番
の美少女として島では有名なんですよ？」

「か、家政婦、美少女……うん。まあ、理解しとく……」

総一の言葉にちかげは事も無げに答え、それを聞いた総一は頭を抱
えながら自らの中の認識を更新していく。それを見た後ちかげはに
こりと微笑んだ。

「ところで、総一さんはこの島で暮らす事にしたんですの？」

「ん？ ああ、帰れそうにないしわくわく探しみたいからな……
そういえば」

「？ なんですの？」

ちかげの問いに総一は頷いてそう返し、思い出したように呟く。それを聞いたちかげが首を傾げると総一はちかげに尋ねた。

「俺の荷物を見なかったか？　そういえば長老の家から出た後から見てないような……長老のところに忘れてきたかな？」

「あ……ごめんなさい。私が持ってますわ、見たこと無い書物があったものでつい……今取ってきますね」

総一の言葉を聞いたちかげはすまなそうに頭を下げると家の中に入って行き、数分程度で彼の鞆を持って戻ってくる。

「申し訳ありません、面白い小説や本があったもので」

「小説？　好きならやるぜ」

「いいんですの！？」

ちかげの言葉に総一が軽くそう言つとちかげは驚いたように返し、彼もうんと頷く。

「どうせ一回読んだら内容ほとんど覚えるからな。本って初めて読むにはわくわくするんだが読み直すことにわくわく出来なくなるのが苦手なんだよな……」

「ありがとうございます。あと、その……これとこれもただけないでしょうか？」

総一のため息交じりの言葉にちかげは嬉しそうに微笑んで返した後どことなく言いにくそうにそう続け、二冊の本　一冊はミステリ

「一冊は雑誌　を見せながら尋ねる。それにも総一は頷いた。

「ああ、いいぜ……さてと、んじゃ少し村でも散歩してくるか」

「ありがとうございます。あ、お礼と言つてはなんですが泊まるどころが見つからなかったら家に来てください。客間をご用意しておきます」

「……考えとくよ」

総一は合計三冊の本をちかげに渡すと鞆を背負い、村の方を見る。彼の呟きを聞いたちかげが微笑みながら尋ねると総一は少し考えてからそう返し、走り出す。そして彼の姿が見えなくなったのを確認するとちかげは黒い笑みを見せた。

「男の人の生態を調べてみたいと思ったのですが、まあ今夜来てくれる事を祈りましょうかね」

ちかげは黒い表情でそう呟くと三冊の本を大事そうに抱えて家の中に入ってしまった。

その間に総一は一気に村へと駆けており、村の中を歩いていた。

「あ、あの方が……」

「もう一人の方は……」

「？」

村に住む人達はざわざわとなりながら総一を見ており、それに彼は首を傾げながら視線だけで村を見回す。

（なんか違和感あるな？……なんだ？）

「あ、総一！」

村を歩いている間に感じる違和感、それに総一は首を傾げていたが自分の前を歩いていたある一人に声をかけられると我に返る。

「行人か、それにすずも」

「やあ。結局帰れなくってさ、この島ですずの家にお世話になる事にしたよ。総一はどうするの？」

「まだ考えてないが、よく知らない相手に迷惑をかけるわけにもいかないしとりあえずは野宿だな……ただ、野宿に使うテントは船に置きっぱなしだったからな……」

「あー、それは困るね。というか総一、そんなものまで持つてるんだ……」

総一の言葉に黒髪の少年 行人は笑いながらそう言った後総一に尋ね、それに彼は肩をすくめてそう返す。それに続いている彼の言葉に行人はうんうんと頷いて返した後苦笑を見せる。

「ま、そういうわけでとりあえずその森の中で丁度いい木でもないか探す事にする。じゃあまた明日な」

「うん」

「気をつけてね？」

総一の言葉に行人が頷くとさすがそう注意するように呼びかけ、それに総一はへいへいと返すと森の方に歩いていく。そして森の中を少し歩くと太くて少し高い木を見つけ、総一はその木から伸びている太い木の枝を見定めると軽く跳躍してその木の枝に飛び乗る。そして背負っていた鞆を適当な木の枝にかけると木に背中を預けた。

「ふう、嵐に巻き込まれたり色々あつて疲れたな……丁度日も暮れかけてるし、もう寝るか」

総一はそう呟くと疲れが出てきたのか欠伸をして目を閉じ、疲れによつて出てきた睡魔に身を委ねた。

「やーっ」

「く……」

それから時間が過ぎて翌日太陽が昇り始めた時間帯、妙な声が僅かに聞こえるが総一は気づかず木の枝の上で眠っていた。

「ぎゃーっ！ー！ー！」

「！？」

その悲鳴は近づいてきており、総一は驚いたように目を覚ますと近くにかけておいた鞆を取って木から飛び降りながら背負い、声の方に向かう。もちろんただ声の方に行くだけではない。

（あの声は行人？ 声が聞こえる地点が移動しているって事は移動

しながら悲鳴を上げているって事、声の方角から考えて……こつちだ！）

総一は声の聞こえる方角とそのおよその距離を割り出すと昨日歩いていたその部分の地形の記憶を辿り、行人より先回りをするように走り出す。そして一本の道に出るとそこに立っていた少女　誰かを探しているようにきょろきょろと辺りを見回している　に氣づく。

「りん！？」

「あ、総一のダンナ！　あ、あのさ、これ！」

少女　りんの姿に総一が声を出すとりんはよかったというように微笑んだ後顔を少し赤くしながら手に持っていた物　細長く、布でくるんでいる　を差し出す。それを見た総一は僅かに微笑んだ。

「もう出来たのか？　流石職人だな……すまん、ありがとう」

「あ、そんな……べ、別にあたしにかかればこのくらいはさー！」

総一は微笑みを浮かべながらそう言い、りんにお礼を言う。それを聞いたりんはあははと笑いながらそう返し、総一はそれを軽く撫でる。

「止ーまーれーっ！ー！！」

「な、なんだいこの悲鳴！？」

「っと、そうだった」

すると行人の悲鳴がまた聞こえ、それにりんが驚いたように身体を仰け反らせると総一は思い出したように声の方を向く。とその方向から丸っこい何か　体型は丸っこく、ダチヨウのような足がついている鳥らしき生き物　が走ってくるのが見えた。

「なんだありや!？」

「もんじろー!?　ってことは……あやねだね」

総一が驚いたように叫ぶとりんも呆れたように言う、と総一はもんじろーと呼ばれた生物の上に一人の少女が乗っており、後ろは行人が縄で足を括られ引きずられているのに気づく。

「止めるか……こいつの実験も兼ねて」

総一はそう呟きながら手渡された物の布を払いのける、とそこにあったのは木刀　ただし鞘付き　で、総一は鞘付き木刀の鞘を左手に握り、腰のところに持っていくと右手で木刀の柄を握り、姿勢を低く取る。まるで居合いの構えのように。

「はあっ!?!」

そして気合の入った声が響くと同時に総一ともんじろーが交差、その時りんの目には総一は全く動いてないように見えていた。

「つまらぬものを斬ってしまった……ってな」

「ど、どしたのもんじろーってわーっ!？」

総一の言葉の直後もんじろーがぐんと揺れ、直後勢いよくすつ転ぶ。その勢いで上に乗っていた少女　確かあやねと呼ばれていたは慣性の法則により吹き飛んで地面に落っこち、その坂を転がった拳句流れの速い川に流されていった。それをもんじろーがあちやーというような表情で見ている隙に総一が行人を結んでいた縄をリュックの中に入れておいたナイフで切っておく。

「ひ、ひどい目にあった……」

「大丈夫か？」

行人のはうはうの状態での言葉に総一が尋ねているとりんはぼかーんとなっており、驚いたように尋ねる。

「そ、総一のダンナ！？　今一体何やったんだい！？　手品！？」

「違うっての、もんじろーだったか？　あいつの脛に居合い斬りを叩き込んだだけだ。見えなかったか？」

りんの驚いたような声に総一は呆れたようにそう返し、見えなかったかと返す。それにりんは黙ってこくと頷いていた。

「ところであやね、流されていつちゃったんだけど……」

「ああ、大丈夫大丈夫、いつもの事だからさ」

「「あ、そう……」」

行人の言葉にりんはやはり事も無げに返し、それに行人と総一は唱和で返す。それから総一は鞘に収めていた木刀を抜く。

「しかし、これくらいなら当然だけど傷一つないな。本当にタダで貰うのが悪いぐらいだ、いい仕事だな、りん」

「あ、いや、実は……あ、あたしにかかれば軽いもんさ！ あっはっはっは！」

総一の言葉にりんは言いにくそうに顔をそらして両手の人差し指をつんつんと合わせていたが突然そう笑い出し、二人は顔を見合わせてきょとんと首を傾げる。すると横に草むらが不自然にガサガサと揺れ、総一は咄嗟に木刀を鞘に納めて草むらの方を向き、抜刀の構えを取る。その直後草むらから巨大な影が現れた。

「うぱーっ」

「く、くまあっ！？」

「胸に月の模様、って事はツキノワグマか！？」

出てきたのは熊が幼児向けにデフォルメされたような動物、それを見た行人が悲鳴を上げると総一も構えを取りながら声を上げる。

「なんだいゆきの、随分速いじゃん、珍しい」

例によってりんは事も無げにクマに声をかけている。するとそのクマの頭の上からぴよこんと一人の少女　まだ幼いように見え、緑色の髪を腰くらいまで伸ばしている　が顔を出し、くすくすと笑った。

「りんちゃんだって人のコト言えないじゃん。何企んでんのカナ？」

「「企む？」」

「た、企むなんて人聞きが悪い！ あ、あたいはただ昨日作った注文品を一刻でも早く総一のダンナに届けたいと思ったただけだよ！！」

「ふん、りんちゃんが注文品をたった一人でたった一日で？」

「わー！！！！ わー！！！！」

少女 ゆきのの言葉に男子二名が首を傾げるとりんは慌てたように返し、ゆきののがにやにやと笑いながらそう言うとりんは大声を出してその声を遮ろうとする。それを見ながら総一がポツリと呟いた。

「こまつしゃくれた子供だな」

「しつれーね！ れでいーに向かってブジョ、ク……」

総一の言葉の瞬間ゆきのに代わってクマが制裁クマチョップを叩き込み、ゆきのが憤慨したように叫ぶがその言葉はどんどんしぼんでいき、りんと行人、そしてクマ自身も驚いたように目を開く。完全に不意打ち且つ岩をも砕きそうな一撃、総一はそれを紙一重でかわし且つクマの懐に入っていた。

「……驚かせるな、それとクマに殴られたら死ぬだろうが」

「く、くまくまの一撃を初見でかわすなんて……」

「まったく……ま、お前みたいな年頃の奴が子供扱いされたくなく大人ぶりたい気持ちは分かる。軽率な発言悪かったな、謝る」

総一の言葉にゆきのは驚いたように呟いており、総一は呆れたように悪態をついた後そう続け、ぺこりと頭を下げる。それを見るとゆきのは少し黙った後クマ　くまくまと呼ばれていた　から下りて総一の前に立ち、頭を下げた。

「私も、くまくまに殴らせちゃってごめんなさい」

「よし、えらいえらい」

ゆきのの謝罪の言葉を聞いた総一は微笑を浮かべながらゆきのの頭を撫で撫でする。とゆきのは頭を押さえて呆然としており、りんも総一の方を見て呆けているのに気づく。

「……なんだ？」

「「な、なんでもないです！……！」」

総一の言葉にりんはそう言って走り去っていき、ゆきのもくまくまに乗ると一直線に走り去っていく。

「「……なんなんだ？」」

それを見送りながら男子二名はそう呟き声を上げていた。それから二人は村へと出る。

「さて、どうする？」

「朝起きたらあやねに引きずられてたから、一旦すずの家に帰った方がいいかな？……でもどっちだろ？」

総一の言葉に行人は苦笑ながらに返し、困ったように頭をかいて続けると総一もさあなと肩をすくめ、目線のみでそつと周りを見回した。

「だが、この島何か違和感が無いか？」

「そつだよね、昨日からなんか……見られてるような……」

総一の言葉に行人も辺りを見回しながら返し、それに総一も頷く。現在進行形で視線を感じているもののその原因が分からなかった。

「あー」

「うひゃあっ!？」

「よお、ちかげさん」

突然声をかけてきた相手　ちかげに対し行人は防衛本能が染み付いたのか総一の後ろに隠れ、総一はよおと右手を挙げる。それを見るとちかげは困ったように総一を見た。

「総一さん、泊まるところが無かったんなら家に来てくださればいいのに」

「ああ、厚意を無下にしてすまない。だが流石に初めて会った相手の家に世話になるわけにはいかないからな……ああ、ところでずの家はどつちか知らないか？」

ちかげの言葉に総一はすまなそうに笑ってそう言った後に続け、それにちかげはにこりと微笑んだ。

「それなら私がご案内します」

「ああ、すまん、頼む」

「……いじめない？」

「俺の知る限りだが、ちかげさんはまだ大人しいし良識がある、安心しろ」

ちかげの言葉に総一が軽く会釈しながら言う。行人は僅かに震えながら尋ね、それに総一が子供に言い聞かせるように行人に言う。そのせいでちかげがにやりと黒い笑みを浮かべていたのに二人は気づいておらず、ちかげは行人に声をかけた。

「そういえばご挨拶がまだでしたね、私はちかげと申します。よろしくね」

「あ、はい。行人です」

ちかげが名前を名乗ると行人もそう名乗る。総一はそれを大人しく眺めていたが突如背中に寒気を感じると振り返りながら声を上げた。

「二人とも、伏せろ！」

「「えっ!?!」」

その言葉の直後二つ何かが飛び、その一つに狙われていた行人は総一の指示通り伏せてかわすが驚きゆえか伏せていなかったちかげにそれが当たり、もう一つの方　こっちは総一を狙っていた　は総一が横向きにして出した木刀の鞘に阻まれる。そして総一は木刀を左腰にやるとその何かが飛んできた方にある草むらに向けて声を

出した。

「誰だ!？」

その言葉と共に草むらから一人の女の子　背はゆきのより少し大きく、真つ黒い髪を長く伸ばしている　が姿を現した。

「私の吹き矢……かわしたし防いだ……」

少女はそう呟いてにまあと笑みを浮かべると今度は発射口がたくさんについている吹き矢を取り出す。

「連射式!？　い、行人、逃げる!！」

「あ、ああ!」

それを見てぎょつとしたのもつかの間、次々飛んでくる吹き矢の矢を総一は木刀を振り回し打ち落としながら行人に叫び、それを聞いた行人が走り出すと総一も木刀の一閃で矢を撃ち落とした直後木刀を鞘に収めながら彼女に背を向け、走り出す。それから少し走り、もう吹き矢の少女は振り切っただろうが二人は止まるに止まれなかった。

「なんで!？　なんでこんなに追いかけれなきゃなんないわけーっ!？」

「知るか!　とにかく撒くまで逃げるぞ!」

まあそりゃ村中と言っても過言ではなさそうな人数の女の子に追いかけていては止まるわけにはいかない。捕まったらえらい事に

なりそんな雰囲気は背中越しでもビンビンに感じ取れ、行人の涙声
での言葉に総一もそう叫んで二人は全力疾走を行っていた。

すると突然何かひゅんっという風切り音が聞こえ、直後二人と女
の子達の間一人の少女　　すずが入る。

「すず!」

「もうっ!　みんな仕事さぼって何やってるの!?　行人は私が面
倒見るようにってオババから言われてるんだよっ!」

「そったらコト言っつて、男を独り占めするつもりさ!」

「そーさそーさ!　もう一人くらい渡してくれてもいいんじゃない
さ!」

「ずるいさずるいさ!」

「そ、そんなつもりないよお、それに総一は野宿してたみたいだし
……」

その姿を見た男子二名が声を上げるとすずは女の子達に向けて注意
する。しかしその女の子達からはブーイングが飛び、その勢いにす
ずは押されたようにしぼんだ声でそう返していた。

「わたしらだつてすずみたいに”いちゃいちゃ”とか”でえと”と
かしてみたいさね!」

「いちゃいちゃ?」

「してたのか?」

「してないっ!!--!」

女の子の一人の言葉にさすが首を傾げると総一が行人に尋ね、それに行人は大声でそう叫ぶ。そしてさすが女の子達を止め切れなさそうと判断し、総一がもう一度逃げるタイミングを計り出した、その瞬間

「静まれええええいつ！！！！」

オババこと長老　この一喝が響き渡り、女の子達の発していた覇気が一瞬で静まる。そしてオババは両腕を組みながら険しい表情で女の子達を見回す。

「まったく、どいつもこいつも盛りおって」

『だつてえゝ、お年頃なんですものゝ』

「まあ、おぬしらの気持ちも分からんではない。仕事にも手がつかんじやろつし、この事態を丸く治めるためにもここは一つ……」

オババの言葉に女の子達は示し合わせたようにそう言い、それを聞いたオババはうむむと頷きながら言うで一息つき、ぐつと拳を握り締めた。

「第一回！　婿殿争奪おにごっこ大会を開催しよう！！！！」

『いえーいつ』

オババの宣言の直後さっきまでの緊張感はどこへやらほのぼのムードへと場が変わる。しかもなんかいつの間にか第一回婿殿争奪鬼ごっこ大会と書かれた横断幕　下の方には小さく「あいらん花ヨメ

の会」と書かれている　が現れていた。

「「って、ちょっと待ったあっ！！！」」

「なんじゃ婿殿？」

しかしそう聞いて黙っているわけにもいかず男子コンビが一糸乱れるツツコミを見せ、それにオババが首を傾げて問うと行人が声を荒げる。

「婿殿言つな！　っていうかなんでいきなり僕達が婿にならなきゃいけないんだよ！？」

「どういう事なのか、詳しく説明願えるか？」

行人に続いて総一が言い、それにオババはうむと頷いた。

「仕方が無かるう。この島には今おぬしら以外に男がおらんのじゃから」

「なっ
」

「はっ
」

「「なにいいいいいいいつ！！？？」」

オババのあっさりとした言葉を聞いた男子二名の啞然とした言葉の直後、島中に響き渡らん勢いの大声が村に響き渡った。

第二話　ながされたのち追われて、衝撃の事実（後書き）

一段落置けるとこまで、今回は流れ着いた後、鬼ごっこ直前までを考えて書いたら……予想以上に長くなつたな。

ちなみに総一は抜刀術の使い手です、居合い斬りつてなんかかっこいいでしょ？さあ次回は鬼ごっこ編、どういう風に書こうかな？もしもあるならば感想お待ちしております。それでは！

第三話 追いかけて、おにごっこ大会

この島では十二年前まで毎年“漢かんだらけの大船釣り大会”が行われていた。十二年前まで、そして行われていた、という過去形なのはその十二年前に百年に一度と言われる規模の大波に襲われてしまい、島の男は全員島の外に流され行方不明になってしまったためである。つまりそれ以来十二年間、この島には一人たりとも人間の男はいなかったというわけだ。

「男がいなくなり、もはや滅ぶのみと思っていたところにおぬしらが流れ着いた。もはやこれは天命という他ないじゃろう。海龍様のお導きじゃ……」

オババはそこまで説明すると目に涙を浮かべてありがたやありがたやと拝むように両手を合わせる。

「だからって……」

「納得できるわけないだろうが……」

行人と総一は呆れたようにうつむきながらそう言う。

「婿殿、娘達を見てみい」

「「?」……!?!」

突然のオババの言葉に二人はつい従ってオババの後ろにいる村人達を見る。とすずを除いた全員から何か嫌なオーラを感じ取れた、何かピンク色の殺気が混じったような、そう、言ってみれば男二人を草食獣とすれば彼女達の気配は獲物を見つけた肉食獣のそれだ。

「「……」」

「十二年間眠っていた女の本能が一気に目覚めたんじゃ、これはもう誰かのモノに決めなければ収まらんじゃろ」

思わず二人とも驚きのあまり閉口してしまふ。すると行人はピーンと何か思いついたような表情を見せ、口を開いた。

「ぼ、僕と総一は14歳！ まだ結婚できる年じゃ」

「行人、その理屈は通じない」

「え？」

行人は現在の日本の婚姻に関する法律を使つて言い負かそうとするがそれを聞いた総一はすぐさまそう言い、それに行人がきょとんとした顔を見せるとオババも首を傾げた。

「何を言つておる？ 14、5で結婚は当たり前じゃろ？」

「忘れたか？ この島は明治初期の文明が残っている。その考えで言えば俺達の年代はむしろ結婚適齢期なんだ」

「そ、そんな……」

オババの言葉に総一が説明すると行人は啞然とした表情を見せる。と今度は総一が口を開いた。

「だが、いきなり結婚もどうかと思うんだが……おにごっこ大会だったな？ じゃあそれに俺達が勝てばこの場は置いておくって事にしてくれないか？」

「うむ。まあお主らが選べないなら島民も増えるし、全員を嫁にしてもらってもいいと思ったんじゃないのう」

「全力で断る！」

総一の言葉にオババがにやと笑いながらそういうと総一が鋭く突っ込みを入れる。そしてそのまま流されるようにおにごっこ大会が開始され、オババは全員の前に立って説明を始める。

「それではおにごっこ大会の説明を始める！ 規則は三つ！――
つ！ 範囲は島の西側のみ！ 特に東の森には入らぬこと！」

「行人、作戦がある」

「？」

オババの説明の横で総一が行人を呼んで耳打ちし、行人は首を傾げる。

「二つ！ 制限時間は一番星が輝くまで！ 今の時期はあの辺！」

「って訳だ。おにごっこってんだから最終ルールはこんなもんだろ、これなら絶対に勝てる」

「なるほど！ 総一頭いい！」

オババがびしつと富士山に似た山を指差している横で総一と行人は相談し、総一のにやりとした笑みでの言葉に行人は目を輝かせて返す。

「そして三つ！ 最初に婿殿に触ったものを勝者とする！」

「やっぱりな」

「総一の言う通りだったね」

オババの最後の言葉を聞いた総一と行人はにやりと笑う。二人には必勝法がある、このルールが定義された今負けは無い……はずだった。

「ただし！ 婿殿同士が触った場合は勝者にはならずおにごっこは続行される！！」

「……ええええつ！！؟؟」

その次の瞬間のオババの言葉に二人は声を上げる。総一の作戦は単純、開始になった瞬間総一が行人に触る、またはその逆の方法ですぐに勝者を男子のどちらかにするとうものだったのだ。するとオババは二人の方を見てにやりと笑った。

「ワシがその盲点に気づかんでも思ってたか？……以上！ それ以外なら逃げる方も鬼もなんでもあり！！ 婿殿達が走り出した後、100数えたら鬼の開始じゃ！！」

オババの言葉に二人が硬直している間にオババは説明を終了、改めて男子二人の方を向いた。

「それでは婿殿、開始の準備をしてください」

「……はい」

オババの言葉を聞いた二人は女性達に背を向け、何故かクラウチン

グスタートの構えを取る。そして互いにせーのと息を合わせ同時に地面を蹴って前に飛び出した。それと同時にオババが「1、2、3」と数字を数えていく。

「ど、どうするの！ 総一！？」

「作戦失敗、こうなりや意地で逃げ切るだけだ！ 俺はまだわくわくを探したいんだ！」

「総一の事だから結婚をわくわくとか言うと思ったけど……」

「なわけあるか！！ 流石に無理矢理の結婚をわくわくするというほど感性を鈍くした覚えは無い！」

「だよね……にしてもずっと男がいなかったなんて、道理ですずやあやねが平気で風呂に入ってくると思った。なるほど、そのせいか……」

行人と総一はそう会話をしながら走り続ける。と後ろの方からオババの「始めえ！！！」という叫び声が聞こえてきた。

「でも、女の子達が僕達に追いつけるかな？ これでも脚力には自信が……」

行人の言葉が終わる前にドドドドドという地響きのような足音が聞こえ、二人は走るスピードを緩めないままそつと後ろを見る。とまるで自分達を黄泉の国へ引きずり込もうとするお化けのようなオーラを発している女性陣がわらわらと自分達を追いかけているのが見えた。

「はやっ！？ つーかこわっ！？」

「行人！ もっと早く走れっ！！」

「無理ーっ！！ やばっ、追いつかれるっ！」

行人が叫んでいる間に総一はまだ全力を出してなかったのか行人より数歩先を走りながら声を上げるが行人は既に全力疾走、少しずつ女性陣との距離が詰められている。と次の瞬間。

「！ 行人！ 今だけでいい、スピード上げるー！！」

「えっ！？」

総一の声が響き、行人は限界以上のペースを出す。するとその次の瞬間行人のすぐ後ろに迫っていた女性陣が全員倒れた。

「これは……ってわっ、とんかつ！？」

「ぷー」

「今の内に逃げ！」

驚いていた行人の頭の上にとんかつが乗っかり、ぷーと嬉しそうな声を上げる。その間に総一が来いとジェスチャーをし、二人と一匹は森の方に走る。まっ平らで見晴らしがいい場所よりは死角の多い森の中の方が逃げやすいだろうという判断からだ。しかし女性陣の執念も相当なもの、すぐさま立ち上がって追いかけて始めている。

「ど、どうする？」

「しょうがない……行人、森の中に入ったらすぐ二手に分かれるぞ」

「分かった。総一、無事でね」

「お互いにな」

行人の言葉に総一は少し考えたとすぐに策を打ち出し、その提案に行人はうんと頷いてそう言う。それに総一も頷きながらそう返した。そして二人は森に入った瞬間素早く二手に分かれる、それを見た女性陣は驚いたように足を止めた。

「ふ、二手に分かれただ!？」

「ど、どっちを追うだ!？」

女性陣は行人と総一を交互に見ながらそう声を上げる。

(思った通り、突然二手に分かれたらどっちを追うか僅かに迷いが生じる……)

(その僅かな隙に少しでも遠くに逃げる……)

(（それが、俺（僕）達に残された勝機!!!!）)

そして総一と行人は心中でそう叫びながら森の中を走っていった。

「はあー、はあー……さ、流石の私も危なく魚の餌になるとこだったわ……」

一方媚殿争奪おにごっこ大会スタート地点。黒髪をツインテールに

した巫女服の少女　あやねは息を荒げながらそう呟き、巫女服を絞って水を絞り出していく。

「ウフフ、見てらっしゃい、今度こそ行人様を私のものにしてやるわ……それにしても変ね、さっきまで大勢の気配があつたのに……ん？」

あやねはそう呟いていると巨大な横断幕に気づき、それを見上げると書かれている文字に目を通す。

「なになに、第一回、嬪殿争奪……おにごっこ大会！？　ちょ、ちょっとー！　私も入れてえーっ！……！」

そう叫びながらあやねも走り出した。

「……撒いたか」

ガサツと草むらから顔を出しながら総一はそう呟き、ふうと息を吐いた。

「これで一息はつける……だが油断は出来ないな、とりあえずもう少し奥に行ってみるか……」

総一はそう一人ごちながら山奥の方に歩いていく。その背後、彼から少し離れた木の枝の上に一人の少女が立っていた。

「見つけたぜ、総一のダンナ……」

探し物ならば高いところ、そして高いことといえば大工のあたい。りんの自論はこうだ。そしてその言葉通りりんは総一を見つけている。

「母さんに言われた通り、あたいが総一のダンナに惚れてるかはまだ分からない……けど、他の奴に捕まっちゃうくらいならあたいは絶対に総一のダンナを捕まえてみせる！」

りんはそう叫んでむんと気合を入れると木の上から垂れ下がっている長い蔓に掴まり、その勢いで総一に空中から突進する。

「ダンナ、もらったあつ……！」

ごおおおおっという擬音が聞こえそうな勢いでの突進、それに対し総一はきよきよと辺りを見回しておりりんには全く気づいていない……ように見えた。

「なっ!?!」

次の瞬間総一はりんを背を向けながら跳躍、りんが掴まっている蔓を後ろ目に見ながら木刀に手をやる。

「げっ……」

手を伸ばしても総一には届かない。そして次の瞬間総一の振り返り様の居合い斬りがりんの掴まっている蔓を切り、その遠心力によりりんは思いつきり吹っ飛ぶ。総一は着地をするとそれを見ながら声を出した。

「りん、すまない！ 恩人に対してこんな手を打つのは義に反するがこっちも捕まるわけにはいかないからな。この詫びはまたいずれ

「！」

「ふにゃ……」

総一は律儀に謝ると一気に山奥に向けて走っていく。りんは吹っ飛んでその先にあった木に叩きつけられた後その反動で逆さまになりながら地面に倒れ、目をぐるぐると渦巻きにし気絶してしまっていた。

「……川か。少し水でも飲むか、喉が渴いた……」

総一は川に出ると両手で川の水を掬い、口に運んで喉を潤わす。流石化学物質による汚染とは無縁の綺麗な水だけあって美味い。総一がそう思いつい気を抜いていた次の瞬間、何者かの気配に気づき、服で水を拭うと気配の方を見る。と同時に総一の目の前に一人の人影が現れた。

「総一！」

「すず！？ どうした！？」

「い、行人が私を庇って東の森の主に吹っ飛ばされちゃって……た、多分西の大楠の方に……」

「行人が！？ 分かった。俺もついていこう、どっちだ？……あ、触れるなよ、念のため」

総一の姿を見た瞬間すずが声を上げ、その様子からただ事でないのを察したのか総一が尋ねるとすずは慌ててそう説明する。それを聞いた総一は分かったと頷くとどっちかと尋ねる。ただおにごっこの

最中のため万が一の可能性を考慮、すぐに触れるなと釘を刺しておくのは忘れない。

「あ、あつち。私が先に行くからついてきて」

「……ああ、頑張る」

流石にしたーんしたーんと猫のような身軽さで走るすずに追いつける、ついていけるという自信はないがとりあえず総一はこくと頷き、二人は大楠の方に向けて走っていった。

「も、もういや……」

行人は総一と別れた後彼を追いかけてきた女性陣に追いかけられ、ちかげに助けてもらおうと思ったなら彼女は何者かの仕掛けていた罠にはまってしまい、また見つかった女性陣からどうにか逃げ切ったと思ったら川に落ちて流され、滝から落ちそうになったのをゆきのと鷹ことたかたかに助けられたのもつかの間、高所恐怖症の彼はパニックになって大暴れ、それによってたかたかは不覚にも彼を落としてしまい彼は東の森に落下、そこでは食肉植物や東の森のぬしと巨大パンダに襲われ、間一髪せずに助けられた方がいいが直後のぬしの反撃からすずを庇った結果、思いつきり吹っ飛ばされ今に至るわけである。

行人はぼろぼろの状態で蔓に絡まっており、どうにか抜け出した方がいいが直後彼はどどどどという地響きに気づく。

「嫌な予感……」

「いたべさーっ！ー！！」

行人がそう呟いた瞬間彼のいる大楠の木は360度女性陣に囲まれる。そしてさらに大楠の木を登り始め、行人も高所恐怖症をどうのこつの言ってられないのか逃げるために木を登り始める。

「ま、まだ一番星は光らないのか!？」

行人は泣きそうな声で叫ぶ、と下の方に気配が消えていくのを感じ彼は下を見る。何故か女性陣はへなへなと木によりかかり地面に倒れやらで眠り始めていた。

「な、なんなんだ?……うつ!？」

それに行人が不思議そうな表情を見せた次の瞬間、彼の首筋に何かがちくりと突き刺さり、それと同時に彼の身体にも痺れが走る。そして行人も地面に落つこちた。

「あれが西の大楠!」

「はあ、はあ……」

すがびしつと大楠を指差してそう言うがすずを追いかけるので精一杯だった総一は両膝に両手を当てて息を荒げている。

「総一! ごめん、先行くね!」

「……な、情けねえ……明日からジョギングでもするかな?……」

すがすまなそうに言いながら大楠の方に走っていくのを見ながら

総一はぜえぜえと荒い息でそう呟き、辺りに人の気配がない事を確認するとその場に座り込んだ。

「い、行人！？ どうしたの！？」

大楠の根元で行人はぴくぴくと痙攣しており、女性陣は寝息を立てている。それを見たさすがに尋ねるが彼に答える気力は無い。すると彼女の死角になっている地面から何かが飛び、それに間一髪気づいたずは素早くそれを受け止める。しかしその次の瞬間彼女の身体に痺れが走り、立てなくなってしまう。

「ウッフ、即効性の痺れ薬よ。流石のあなたも動けないでしょ？」

「あ、あやね……」

聞こえてきたのはあやねの声、すずはその声の方を向くと不自然に地面から生えている筒を発見、その中からあやねの声が聞こえてくるのに気づき、すずは力を振り絞ってずりずりと地面を這って筒に近づき、それをぱくんと口に銜える。

「せーのー」

「ぐげえっ！！??」

思いっきりぷうつと筒に息を吹き込むとあやねが地面から身体を膨らませた状態で現れ、苦しそうに地面をのた打ち回る。

「ちよつとあやね！ 勝負はどうなったの！？ ねえ！？」

「あんたねえ！ 今のはマジで死ぬかと思ったわよ！！！！」

「あ、ごめん」

すずは凄い剣幕で叫ぶがあやねはそれに勝る剣幕で叫び、すずはつい謝る。それを聞いてからあやねはふんと鼻を鳴らした。

「安心なさいすず、彼はまだ捕まえてないから」

「ふえ？ どーして？」

「決まってるじゃない……」

あやねの言葉を聞いたすずは不思議そうに首を傾げて問い、それにあやねはうんと頷いてそう言つとびしつとすずを指差す。

「悔しがるすずを前に捕まえた方が気持ちいいからよ！」

「暗っ……なんであやねはそんなにすずに突っかかるの？」

あやねの宣言に行人は思わずそう呟き、彼女に尋ねる。

「それはね、すずは昔っからの大会でも毎回なんばーわん、それに比べて私は毎回ビリだったからよ！　なんかムカツクじゃない！」

「……それ、ただの八つ当たりじゃない」

「人のジャマばかりしてるからだよ」

「そーしてー、一番むかつくのは……」

あやねの言葉に行人とすずは痺れている身体のため息をつく。する

とあやねはゆらゆらとせずに歩き寄り、彼女の胸をがしつと掴む。

「これよー！！ ちょっと前まで互角だったのにあつという間に追い抜いて！ しかも圧倒的にー！！」

「ふにゃあーっ！？ す、好きでおつきくなったんじゃないもんっ！！」

あやねの怒号に対しずは訳が分からないとばかりの声を上げ、行人は鼻血を噴出する。そしてあやねはさすがに離れるとびしつと行人を指差した。

「フフツ、でも今日も勝利で今までの敗北をチャラに出来る。何せこの島で二人しかいない男の内一人をシモベに出来るんだから！ みーんな私を羨望の目で見つめるのよー！！」

「誰がシモベじゃー！」

オーッホッホつと高笑いをしながらのあやねの言葉に行人は声を上げる。するとあやねはゆっくりと行人の方を向き、にやりと怪しい笑みを浮かべた。

「それじゃあ行人様……そろそろ……」

「くっ！ ま、まだ光らないのか！？」

「私のものに、なりなさーいっ！！」

「わーっ！ ヤダーツー！！」

あやねはそう叫んで行人に飛び掛り、行人はじたばたと暴れる。

「どおーっ、りゃあーっ！……！」

「えっ？ ほげえっ！？」

すると突然聞こえた叫び声の直後あやねの側頭部にぎゅんぎゅんと回転していた木刀がぶち当たり、あやねは悲鳴を上げて吹っ飛び、ギリギリ行人に手が届かない範囲に落ちる。

「すず！ 捕まえる！！」

「捕まえるって、身体が……あれ？……動く……」

「あ、ほんと……まさか、即効性だけに切れるのも速かったりして？」

木刀を投擲したらしい総一の叫び声にすずは苦しそうにそう言うが直後自分の身体が動くのに気づき、行人も自分の手を握ったり開いたりを繰り返しながら苦笑混じりに言う。

「即効性？ なんだ、薬でも使われてたのか？」

そこに総一が合流、どうやらさっきまで遠くにいたせいで状況を理解していなかったらしい。そしてすずはよいしょとあやねを持ち上げる。

「さて、と……人を見得の道具にしようとするような女にいー」

すずはそう言いながらあやねを背負い、富士山ふじやまの方に身体を向ける。

「媚を貰う資格はあー……なあーいつ……!!」

「キヤアアアアアッ……!!」

すずは見事な背負い投げを決め、あやねは悲鳴を上げながら富士山の方に吹っ飛んでいく。そしてあやねが飛んでいった先がキラーンと光った。

「あ、光った……そ、総一は捕まらなかった!？」

「どうにかな」

「って事は、僕達の勝ちだーっ……!!」

それを見た行人は立ち上がって安堵の息を吐き、総一に尋ねると彼も頷く。それを聞いた行人はひゃっほーっと両腕を上げて勝利の声を上げた。

「いーや、総一殿は確かに勝利した。じゃが行人殿、おぬしは負けじゃ」

「えっ!？」

「何？」

すると突然そこに現れたオババがそう言い、それに男子二人が驚きの声を上げる。そしてオババはすずの方を向いた。

「優勝は、すずじゃ!」

「ふにゃ？」

「何いつ！？ ど、どうして！？ いつ、どこで僕がすぐに捕まったのさ！？」

オババの宣言にさすが首を傾げると行人はオババに講義を行う。とオババはしれつとした表情を見せた。

「ワシは捕まえたら、なんて一言も言つとらん。触ったものが勝ちと言つたはずじゃ」

「……そうか！ すず、お前確か東の森で行人に庇われたって言つたよな！？」

「う、うん。ぬしの攻撃から庇うために私を押して……」

「「あぁっ！！！」」

オババの言葉を聞いた総一は少し考えた後気づき、すずに見せる。それにすずが頷いてその当時の状況を説明すると行人とすずが声を上げる。確かに、行人からとはいえずに確かに触っていた。すると今度はすずが口を開く。

「で、でも東の森は範囲外だから無効なんじゃあ？」

「黙つとれ。とゆーわけで行人殿はすずのもんじゃ、たくさん子供頼んだぞ？」

「うつ……そ、そんなの納得できるわけ……」

すずの問いをオババは一蹴し、にやりと笑みを浮かべて行人に言う。
それに行人が顔を真っ赤に染め上げた。

「行人……私、行人のこと……」

「は、はいつ!？」

するとすずが突然行人に声をかけ、行人も驚いたように返す。

「いないよ」

その次の瞬間すずは笑顔できっぱりと言い、それに行人はがくんとずっこける。そしてすずは島民の皆を見回した。

「だってこんなの変だよ、結婚ってお互いが好きだからするものでしょ？　なのにこんな一方的な決め方、行人と総一がかわいそうだよ」

すずの訴えに少女達は恥ずかしそうに頬をかくなりの仕草を見せ、行人と総一もうんうんと頷く。

「だから、二人が誰と結婚するかは二人が誰かと好きな人同士になるまでゆっくり待ってあげてもいいんじゃないかな？　ね、みんな？」

「むう……」

「一本取られたようだな、長老。すずの優勝放棄って訳だ」

すずの満面の笑顔での言葉を聞いたオババはむうと唸り、総一もふ

つと笑って返すとオババも頷いた。

「まあいいじゃろう。どうせ婿殿は一生島から出られんわけじゃしの」

オババの言葉に行人は「一生……」と呟きながら項垂れ、総一はその様子を見て苦笑する。それからオババは一つ息を吐くとすずの方を見た。

「しかしのう、すず」

「うにゃ？」

「総一さん、行人さん。親睦を深めるためにうちで一緒にお食事でもどうですか？」

「ああ、ちかげさんには一度約束を反故にしちまってたっけ……」

「あ、ずるい！ だつたらうちの方がおいしー料理を……」

「え？」

「だつたらうちが……」

「いやいやあたいが……総一のダンナ、確かあたいにお詫びしてくれるんだよね？」

「ええ？……」

突然近寄ってきたちかげの言葉に総一が口元に手をやりながらそう

呟くと村人の一人が言い、それに行人がぎよつとなるとまた別の村人、りんと次々近寄ってくる。それに総一もやばい気配に感づき、行人はギギギと油の切れたロボットのような動きで総一を見た。

「そ、総一……」

「しょうがない、ここは……せーのっ」

「「逃げろおーっ……!!」」

行人のもう勘弁してとばかりの涙声に総一はうんと頷くと互いにタイミングを取り、一気に彼女らのブロックを破るとその場を逃げ出す。すると女性陣もその後を追って走り出した。その光景を見てオババはため息をつき、すずの方をじとりとした目付きで見る。

「これでは結局、状況はまるで解決しとらんのではないか？」

「ありや？」

その言葉にすずは苦笑混じりに小首を傾げてそう返していた。

「ぎゃーっ!! いやーっ!!」

その頃、すずに投げ飛ばされたあやねは東の森に着地、そこで東の森にのみ生息する食肉植物に襲われていた。

第三話 追いかけて、おにごっこ大会（後書き）

とりあえず行人は原作通りすずの家に泊まらせるとして、総一はどうしよう？……まあ、野宿でいいかと考えてる自分もいるのは確かなんですけどね。はてさてどうするか？……ま、それでは。

第四話 生活始めて、島での一日

ちちちちちつと鳥のさえずりが響き渡り、昇った太陽の光が木々の間に差し込む。

「んっ……朝か」

太くしつかりと、元気に育った木の上で眠っていた少年 相沢総一は太陽の光を受けて目を開け、眩しさに一瞬目を閉じてからゆっくりと目を開け、起き上がって昨日見つけた大きな木の洞に入れておいたリュックを取り出すと背負い、近くの木の枝に引っ掛けておいた木刀を取る。何の変哲も無い木を、その木の一本の太い枝の上のみとはいえ総一はすっかり自分の部屋のように扱っていた。そして総一は軽く木から飛び降り、呆れたように口を開いた。

「よう、おはようと言すべきか？」

死屍累々と言うが正しいだろう、総一が眠っていた木の下には島民の一部 十人程度だろうか が一纏まりになって倒れていた。

「俺を攫おうなんて十年早い。せめてもう少し気配を消せないと話しにならないぞ」

総一はまたそう言う。彼女らは昨夜総一が寝静まった頃を見計らって自分の家に誘拐、もといお持ち帰り、もとい招待しようとしたのだが彼女らが近づいた瞬間総一は目を覚まして木刀を手に木を飛び降り、気づかれたならば力づくでと来たのだがその全員が総一に気絶させられたのだ。まあ一応風邪引かないようにと全員一纏めにして自分が使おうと思っていた毛布をかけるだけの思いやりはあった

ようだが。

「う、くっ、あっ、ダンナ！……ってあ、朝か……」

「りん。お前まで来るとは予想してなかったぞ……」

夜襲をかけてきた少女、この島の大王であるりんは流石身体が頑丈なのか夜通し気絶していたとはいえ女子メンバーの中では一番に目を覚ます。それを確認した総一は呆れたようにため息をついてそう言い、それにりんはうっと唸り、顔を逸らした。

「だ、だってよお、結局食事はすっちのところで食べちまうし、だったら泊まるだけでもって言ったのに野宿しちまうしさ……か、風邪引いたらどうすんのさ？」

「別に野宿なんて珍しくもない。旅行してた時なんて宿泊費ケチって公園で寝てホームレスに間違われてたんだからな、羞恥心を捨てりやどうってことない。元々身体も病気に対しては丈夫だしな」

「ほ、ほおむれす？」

「あ、悪い。こっちの話だ」

りんは顔を逸らして両手の人差し指をつんつんとつき合わせながらそう言い、それに総一があっさりと言うと聞き覚えの無い単語にりんがきよとし、それに気づいた総一は詫びを入れた後残る女子達を見た。

「さてと、じゃあ残りを起こすか。手伝ってくれ」

「あいよ」

総一の言葉にりんも腕まくりをして返し、二人は気絶したまま眠りについてしまったらしい女子達を起こす。

『総一さん！ 是非うちで朝食を！！！』

「……なんか、旅行中に何回かデジャヴを見たような……あー、その……ごめん」

女子の面々 当然りん含む は起きるや否や全員揃って総一に向けて言い、それに総一は遠い目で呟くがその後にはぺこりと頭を下げる。それに女子達が目を見開くと総一は頭をかいた。

「実はもう朝食、ちかげさんとこで取るって約束しちゃったんだ。ちかげさんには前わざわざ客間を用意してもらったのに反故にしちまったし、悪いけど朝食は諦めてくれ」

『……………』

「……じゃ、じゃあ。またお昼時にでも……………」

総一の説明を聞いた女子達は崩れ落ち、総一はすまなそうに苦笑しながらその場を歩き去っていった。

「まあ、そんな事があつたんですの？」

「まあな。行人にはさすがついてるから俺が集中攻撃だ」

ちかげの家、ちかげは総一が来るからと腕によりをかけた料理を…自分で作ったのではなくばな子さんに頼んで作ってもらい、朝食にサンドウィッチ、デザートにホットケーキを用意していた。

総一が昨夜の襲撃から朝の事を話すとちかげはくすくすと笑いながら返し、総一も肩をすくめる。そしてホットケーキを食べ終わるとフォークを置き、両手を合わせた。

「にしても、和食しかないもんかと思ってたが洋食を食べるとはな…美味かった、ごちそうさまってばな子さんに伝えておいてくれ」

「はい」

総一の言葉にちかげは微笑みながら頷き、その笑みを見た総一もつい微笑を見せる。それからふと思い出したようにちかげに尋ねた。

「そういえば、この島には水道とか電気とかはないんだよね？」

「すいどう？ でんき？ なんですのそれ？」

「ああ、分からないならいい。って事はいかにも現代っ子な行人は色々大変かもな…ちょっと見てくるよ、朝食ありがとう」

総一の問いにちかげは首を傾げて返しており、知らないものと判断すると総一は首を横に振った後そう呟き、席を立ててそう伝言をお願いする。それにちかげはまた微笑みながら頷いた。

「あ、はい。行ってらっしゃい、もし今日も野宿をするというのなら家に来てくださいね」

「考えとくよ」

ちかげの言葉に総一はまた微笑を浮かべながら返してちかげの家を出て行き、彼はすずの家に向かっていった。するとその途中で総一は目的の相手を見つけた。

「「総一！」」

「よう。行人、すず。おはよう」

「おはよう。総一も昨日泊まっていけばよかったのに」

「男二人が女の子一人に世話になるわけにはいかないだろ？ 俺なりのけじめだ」

行人とすずが声を出すと総一も軽く右手を出しながら返し、すずが笑いながら言うのと総一もふっと微笑を浮かべて返す。それから行人の方を向いて口を開いた。

「ところで、これからどうするんだ？」

「ああ、僕もすずの仕事を手伝う事にしたんだけど……」

「やっぱりな」

行人は総一の問いに対し頬をかきながら返しており、やっぱり慣れない仕事に手間取っているらしいなと悟ると総一は頷いた。

「んじゃ、俺もすずの仕事を手伝うとしよう」

「いいの？　ありがとう！」

「ええっ！？　そ、総一大丈夫！？」

「まあ、旅費稼ぎとかで粗方仕事は体験してるつもりだ。実際に見てないからどうともいえないが行人程足手まといにはならないと思うぜ」

「う、うるさいなあ……」

総一の言葉にさすが目を輝かせて返すと行人が心配するように言い、それに総一はくつくつと悪戯っぽく笑いながら返す。それを聞いた行人は罰が悪そうに顔を逸らし、総一はまた一つ笑うとすす達と共に村の方に歩いていった。

「やってるやってる」

「で、すずは何の仕事をするの？」

村に下りると既に村人達は畑仕事や放牧の仕事等を行っており、すずが楽しそうに言うと言行人が尋ねる。それにすずはああと頷くと村中を指し示すようにさつと手を振る。

「ぜんぶだよ」

「「はあっ！？」」

流石に予想外すぎる言葉に男子二名が声を上げる。とすずはこころと笑い声を上げた。

「別に一日でやるわけじゃないよ？ 忙しい人のトコでお手伝いするのが私の仕事なの」

「ああ！ 何でも屋ってわけか」

「なるほど。それで“全部”か、仕事を選ばないのはフリーターの俺にも合ってるな」

「何言ってるのさ中学生……」

すずの言葉に行人が納得したように言うと総一も頷き、その言葉に行人がツツコミを入れる。

「すーずー！ おいもの収穫手伝ってー！」

「あ、はい！」

「早速だな。さ、行くぞ」
「うん！」

早速声をかけられたすずは元気良く返すと声の方に走り出し、それを見た総一が静かに行人にそう言つと彼も頷き、二人もすずの後を追いかけていった。

「あら、行人さんに総一さん」

「おはようございます」

「二人も手伝ってくれるって」

「うん、任せといてよ！」

声をかけてきた二人の少女の名前は行人も総一も覚えていなかったが、その言葉に行人は元気良く返し、総一もああと頷く。そして行人は右腕をぐるぐる回しながら畑に入った。

「よかったー。イモ掘りくらいなら僕にも出来るよ」

行人はそう呟きながら地面から伸びているツルを握る。

「あ、行人。一人じゃ無理だよ、一緒にやる？」

するとさすがに突然そう言い、その言葉に行人はショックを受けたようにうなだれるが直後くつくつと笑い出す。

「た、確かに体力じゃ少しばかり皆に劣るかもしれないけど……見せてやるよ！！ パワーなら負けてないってところを！！！」

行人は気のせいか目をキュピーンと輝かせてツルを引っ張り、その勢いにその場にいた女性陣はおおっと声を上げる。が……。

「ゴメンナサイ、ダメデシタ……」

全然全く引っこ抜けないまま行人は力尽きる。

「どれどれ？……」

それを見た総一は少し笑いながら畑に降り、行人が引っ張っていたツルを握るとふうふうと息を吐いて力を込めた後ふんつと気合を入れて引っ張る。

「……こりゃ、無理だ……」

「何これ？……僕達この島じゃそんなに非力なの？……」

しかし確かに動かないという事を確認すると総一はすぐに諦め、両手をぶらぶらと振る。その後行人がずくんという落ち込みオーラを見せているとそこにさすがが入ってきた。

「ほら、元気出して三人でやるっ？」

「あ、うん……」

「いや、このツルの長さじゃ三人じゃむしろ力はいれにくいだろ。

俺は見てるから、頑張れ、行人」

すずの言葉に行人はうんと頷くが総一はツルの長さから冷静に判断し、すずと行人に抜くのを任せる。それから二人は息を合わせてツルを引っ張るが、すずは引き抜こうと力を入れて引っ張っており、思いつきり行人に密着。行人もそれに少し顔を赤くしながら引っ張っているついに地中からイモが姿を現し、勢い余って二人はすっこける。

「でか……」

そのイモの姿を見た総一が思わず呟いてしまう。イモのでかさたるや下手すれば人間並み、それを見てはと声を出し、総一はイモを引き抜いた二人の方を見る。

「こりゃ一人じゃ絶対無理だ、見る限りのイモの重量や引き抜く際

の土との抵抗を考えても相当な力が……なあ行人？」

総一はそう呟きながら行人の方を見ると表情を固める。行人はすずの上に倒れており、その左手はもう見事なまでにすずの胸を掴んでいた。

「わ、わあっ！？ ご、ごめんすず！？ って、わあああああ
っ！！！」

「い、行人！？ どこ行くのー！？」

「イモに聞いてくれーっ！！！？」

それに気づくや否や行人はすずから飛び退くがその勢いでイモにぶち当たってしまった、そのままイモは行人を巻き込んで転がっていく。それを見たすずの言葉に行人も混乱しながらそう返し、総一は頭をかくと行人とイモの回収のため走り出した。

そしてもう既に満身創痍となっている行人を連れ、すずと総一は村を歩いていく。その先々で総一は珍しいものを見るような目を向けていた。

「それにしても……でかいな、野菜」

「へえ、総一のところじゃ小さいんだ」

「ああ、うん、まあな……」

総一の言葉にすずが意外そうに返すと総一は頭をかいて言葉を濁す。それを見た行人がすずに聞いた。

「で、次は？」

「えと、羊の毛を刈るの」

「羊か。あれ可愛いよなもふもふしてて……」

「へへ、総一って動物好きなんだ。意外だね」

「うつせ。旅行中牧場の方々のご厚意で泊めてもらった時とかにお礼として仕事手伝ってたんだよ……動物っていいよな、見てて和むし……人を特別な目で見ないしょ」

行人の問いにさすが返すと総一は心なしに嬉しそうな笑顔を見せ、それを聞いた行人がからかうように言くと総一は罰が悪そうな表情を見せてそう言った後、本当に僅かな瞬間、下手をすれば見逃してもおかしくはないような僅かな程だったが表情を曇らせて呟く。それに行人は言葉を詰まらせ、ずずはふにや？と首を傾げた。

「さて、と。羊だったか、どこにいるんだ？」

「あ、あっちあっち」

突然表情を元に戻した総一の問いにずずはそう言って走り出し、それを見た総一がいち早く後を追うと行人は一瞬立ち止まって何かを考えるような表情を見せた後走り出した。

そして彼らはずず達が羊と呼ぶ動物の毛刈りに挑戦する……のだが……。

「なんだ？ これ？……」

「羊だよ？ もふもふしてて可愛いじゃない」

総一の絶句した表情での言葉にすずは何言ってるのというように首を傾げて返す。彼らの目の前にいるのは総一達が一般的に羊と呼ぶものではなく、なんとというか綿菓子に鳥の足をくつつけたような生物だった。

「なんかこの島の動物って変わってるよね？ パチモンくさいって
いうか……」

「行人、失礼だ。せめて心で思う程度にしとけ」

行人のひそひそ声に総一もひそひそ声で返し、二人は鋏を貰うと毛狩りを始める。いつも手伝っているのであるうすずと牧場で手伝った事があるという総一は多少姿が変わっていても昔取った杵柄というか手馴れた様子で作業を進めているが行人はどうにも手つきがおぼつかず、それを見たすずが口を開いた。

「あ、行人。気をつけて刈ってね？ その子達怒ると」

「メエッ!？」

「あ、ゴメン」

すずの注意は遅く、行人はちよっぴり羊の身を切ってしまい羊は痛そうな悲鳴を上げ行人は謝罪の声を出す。その次の瞬間羊の群れが行人に襲い掛かった。

「ぎいーやあーっ!!!」

「一斉に襲ってくるから、って遅かった……」

「とあるゲームの二ワトリみたいなやつかな……」

襲われている行人が悲鳴を上げ、さすが及び腰になりながら説明を続けると総一は自分の手の中に避難してきたとんかつの頭を無意識の内に撫でながらそう呟く。

それから三人は牛の乳絞りやら田植えの手伝いやらを行うが行人は乳搾りでは牛にヘタクソと潰され、田植えでは田んぼの中にダイブしてしまう、ものの見事な足手まといっぷりを発揮していた。

「総一、ほんと凄いやね……」

「ああ、今回は牧場や農家の手伝いを生かせて助かった。何事も経験しとくべきだなー」

行人の言葉に総一はうんうんと頷きながら言い、思い出したように足を止めた。

「そうだ、夕食はりんのところで食べるって約束したんだっけ。悪いが俺はここで」

「あ、うん。じゃあまた明日ね」

「おう」

総一は思い出したようにそう言つと踵を返し、さすが手を振つてそついうと総一も軽くそう返してりんの家の方に向かっていった。それを見送るとすずは行人に向けてにこつと微笑む。

「じゃ、私達も急いで帰ろっか」

「あ、うん」

その言葉に行人が頷いたのを確認してからすずはふんふんと鼻歌を歌って歩き出し、行人はその後ろを歩きながらすずを見た。そして彼ははあと深いため息をつく。

「うにゃ？ どうしたの？」

するとそれに気づいたのかすずが振り返り、行人は苦笑のような笑みを浮かべた。

「なんか、ごめんね？ 今日は足引つ張ってばかりで……」

「仕方ないよ、初めてなんだもん」

「でも、すずには何度も助けられてるのに、お世話になりっぱなしなのにさ。僕も総一みたいになんでも出来ればよかったのに。何のお返しも出来ないなんて情けないよ」

行人の言葉にすずは笑いながら返すが行人は暗い表情でそう呟く。
するとすずは静かに首を横に振った。

「うっん、もう充分お返ししてもらってるよ」

「え？」

すずの言葉に行人は驚いたように顔を上げる、とすずは夕焼けに染まっている村の方を見る。村人達が自分達の家に戻っている風景が

よく見えた。

「この島で一人ぼっちなのは私だけなの。私ね、仕事が終わってみんなが家に帰っていくのを見ていつもうらやましいなって思ってたんだ。だから、こうして行人とおうちに帰ったり、お話ししながらごはんを食べたり、一緒に寝たり……行人と一緒に暮らしてくれるってだけで、私すごくうれしいの」

「そうなんだ」

「うん！ だから、私はもう行人には充分すぎるくらいにお返ししてもらってるよ。さ、おなかすいちゃったし早く帰ろっ！」

そついうすずの表情はどこか寂しげで、でも最後の言葉の時は明るい笑顔を見せている。その笑顔を見た行人も思わず笑ってしまい、すずは元気に頷くとそう言って行人の手を引いて歩き出した。

（そつか、すずっていつも明るくて元気な娘だと思ってたけど……すずぐらいの年頃の娘が一人暮らししてて寂しいって思わないはずないよな……ただ一緒に暮らしてるだけで恩返しって言うのも変だけど……まあ、いっか）

行人はそう考え、ふと笑みを零す。そしてすずは自分の家に入りながら元気に「たっだいまー」と声を出していた。

一方総一は、りんの家で夕食をご馳走になった後用意された部屋の中でぼつたりと倒れていた。

「ダ、ダンナ？ 大丈夫？」

「ひ、久しぶりだからってハメ外しすぎた……」

りんの苦笑ながらの言葉に総一はげえげえと荒い息をしながらそう呟く。行人達の前では強がってたようだがどうやら仕事で体力を使い果たしてしまっただけ、それにりんは苦笑を漏らす。

「みことがたまたま実家帰っててよかったよ……」

「え？　なんだって？」

「あ、あーなんでもないなんでもない。それよりすぐ風呂沸かすからさ、風呂入れば少しは疲れも取れるだろ？」

「悪い、頼む……」

りんの呟いた言葉に総一が顔を上げながら返すとりんは苦笑しながら返し、誤魔化すように続ける。それに総一が辛うじて右手を挙げながら答えるとりんも「はいよ」と返して風呂場の方に歩いていく。それを見送ってから総一はふわぁと欠伸をした。

「疲れた……けど、久しぶりに少しわくわくしたな」

総一はそう呟くと一つふつと微笑む。それから彼はりんが風呂が沸いたと呼びにくるまで久々に充実した気のする今日一日を思い返していた。

第四話 生活始めて、島での一日（後書き）

とりあえず総一は基本野宿でたまに誰かの家に泊まるというスタン
スでいくことにします。まあ正確に言えば食事はたまにどこかでご
馳走になって寝るのはそこまで世話になれないという理由から野宿
のつもりだけどこういう感じで流れるに泊まる事になる感じがすが。

第五話 森に行つて、村人交流

「ほあだだだあゝ……」

藍蘭島西の地にあるすずの家。そこに居候することになった少年
東方院行人は朝っぱらから身体中を痛みに襲われていた。

「大丈夫？ 行人？」

「あだだ、全身筋肉痛みたい……昨日の仕事と一昨日のおにごっこ
で……」

「今日は休んだ方がいいんじゃない？」

隣に座っているすずの問いに行人は痛みに呻きながら呟き、すずは
心配そうにそう言うがそれを聞いた行人は首を横に振る。

「そういうわけにはいかないよ、働かざるもの食うべからずって」

行人はそう言いながら立ち上がろうとする。しかしその次の瞬間身
体中にピキッと鋭い痛みが走り、彼はまた崩れ落ちた。

「絶対安静ー」

「ムウ」

行人が崩れ落ちた後にすずが呼んできたオババの診断により行人は
今日は安静にするようにと宣告される。それに行人は悔しそうな表

情を見せた後家の入り口で何事もないように立っている少年 相
沢総一を見た。

「総一は平気そうだね……」

「ああ、まあ身体の節々が少し痛むが動けないほどじゃない。バイ
トの賜物だな」

「はあ……」

行人の言葉に総一が苦笑しながら返すと行人はため息をついた。

「でもどーしよー、今日はみんなで山菜取りに行かなきゃいけない
けど……行人も見えてないと……」

「筋肉痛だから別に問題ないじやろ。山菜採るついでに薬草も採っ
てくるといい」

「あ、そっか」

すずの困ったような声にオババがそう返すとすずはぼんと両手を合
わせてそう言い、立ち上がると行人の方を見た。

「じゃあ、お昼のおにぎり置いておくね？ 今日はずっくり休んで
身体治してね？」

「うん」

すずの言葉に行人は身体が動かせないためうんと口だけで言い、そ
れを見た総一はくっくつと笑いを噛み殺しながら隣に立っているり

んに話しかけた。

「まるで夫婦だな、りん」

「えっ！？ あ、ああ……あ、あたかも、朝ダンナを起こしに行った時は……」

「んじゃすず、時間をくったし急ごうぜ」

「あ、うん、そうだね」

総一の言葉にりんは頷いた後妙に照れたようにそう呟いていたが総一は全く気づかずに話しかけており、それを聞いたすずはうんと頷く。その一連の流れを見たりんは目を細めており、総一はようやくそれに気づく。

「どうした？ りん？」

「あ、ああ、いやなんでもねえよ！ さ、急ごうぜ！」

総一の言葉にりんはあははと笑ってそう返すと走り出し、総一は首を傾げるとその後を追って走り出し、すずも二人の後を追うように家を飛び出した。

それから場所は山に移り、村人達はここで山菜探しを行っていた。ちなみに総一は流石に山菜の知識はほとんどないため持ってきていた木刀で草むらや雑草を払い他の人達が歩きやすいようにしている。

「ちよっダンナ！ ダンナ！ 山菜まで払ってるっ！」

「え！？ あ、悪い！」

突然りんが慌てたように叫ぶと総一は驚いたように手を止め、りんが少しばかりボロボロになった山菜を拾っていく。

「ダンナ、ずっとちから聞いたけど昨日は色々凄かったらしいのに……」

「流石に山菜取りは未経験だ、こつやって草むら払うか帰りの荷物持ち程度にしか役に立つ自信がない」

りんの言葉に総一は肩をすくめながら返し、りんはふうんと呟く。

「あ、えらいとんかつ。まつたけー」

「「ん？」」

するとすずの声が聞こえ、二人はそつちを見る。すずのカゴにはまつたけと思しきキノコが一杯詰められていた。

「すごいね、とんかつくん」

「もうずいぶん見つけたんじゃないのか？」

それを見たちかげとりんがとんかつを褒め、とんかつは嬉しそうに「ぷー」と鳴く。するとそこにゆきのが大きな鴨に乗ってやってきた。

「うちのかもかもはだめ」

「あれ？ 結構何か掘ってなかった？」

「うん……」

ゆきのは鴨　　かもかも頭をぺしぺしと叩きながらそう言つがそれを聞いたりんは不思議そうにそう尋ねる。それにゆきのはこそそとカゴを取り出した。

「ほら、みみずばかり」

「ひいひいひいゝ！！！」

それを見たりんは思いつき悲鳴をあげ、近くにいた総一の背後に隠れる。

「く、来るな！ 寄るな！ 近寄るな！！」

「？ りん、みみずが苦手なのか？」

「子供ねー、みみずごときでうるたえて」

りんの叫び声に総一はきょとんとした表情でそう言い、それを聞いたゆきのはぶぷつと噴出しながらそう呟く。

「う、うるさいクソガキ！ とつと捨てる！」

「クソガキ？……あ、そう。んじゃのぞみどおりに……」

りんの叫び声にゆきのは一瞬ピクツと反応し、カゴを下ろす。それを見たりんはほつと安堵の息を吐いた。

「すてるわよ！」

「っっ！！！！」

その一瞬の隙を突いてゆきのはりんの方目掛けてみみずを投げ、それにりんはもはや声にならない悲鳴を上げるとそれをかわす。するとかもかもはみみずを投げられたのが不満なのかみみずの方に走り、ゆきのはそれを利用してりんに接近するとまたみみずを投げる。

「いやあゝんっ！！！！」

「うりゃうりゃー！！！」

りんがみみずから逃げ、かもかもがみみずを追うのを利用してゆきのはりんを追いまたみみずを投げるとりんは逃げる。その繰り返しだ。

「あの二人、本当に仲いいよね」

「そうね」

「まあ、喧嘩するほど仲が良いとは言いが……」

それを見たすぐくすぐすと笑いながら呟くとちかげがにやりもクスッと笑いながら返し、それを聞いた総一はどこか呆れたように呟く。と何かに気づいたように素早く振り返った。

「どうしたの？ 総一？」

「何かの気配がした」

「ぷー」

総一に続けてとんかつもそう言い、一人と一匹は草むらを見る。と
その一部がさがさつと揺れた。

「何かいる!？」

「気をつけて、ヘビかも」

さすがそう言つて草むらに入るとその後ろからちかげが言い、それ
にすずはうんと頷く。とんかつも下がっており、総一は万ーヘビ等
だった場合すずを守るために抜刀の構えを取りつつすずの後に続く。
そしてすずは草むらをかき分けた。

「……あ、あやね? だつたか？」

そこには芽らしきものが生えた花に食われそうになっているあやね
の姿があり、それを見た総一は呆氣に取られたような表情を見せる。

「大丈夫、あやねだつた」

「なんだ」

「おい!？」

「少しくらいは心配してよ!!」

しかしすずは凄くあっさりとそう言つてその場を離れており、ちか
げも心配する様子すら見せずにそう返す。それに総一が驚きの声を
上げるとあやねもがばつと起き上がって声を上げる。

「あ、そうそう。昨日見かけなかったけどどうしたの？」

「あんたが東の森まですつ飛ばしたんでしょーが……あれから森の食肉植物と乱闘するわぬしに追われるわ森に迷うわ、よーやく助かったと思ったらキノコに当たるわ……流石に今度は死ぬかと思っただわ……」

すずのまたもやあつさりした言葉にあやねは思いつきそう怒号を上げ、今までの経緯を独り言のように説明する。

「ちゃんと生きて帰ってくると思ってたよ。だってあやねだもん」

「それはホメてんのかしら？ バカにしてんのかしら？」

「いや、流石に俺も非常食とかの荷物一切無しで森に迷ったら生き延びる自信はないな……」

「ちよつ！？……つてあれ？ あなたは？」

すずの言葉にあやねがゴゴゴと怒りのオーラを発しながら呟くと総一が呟き、それにあやねは抗議の声を上げようとするが総一を見るときよとんとした表情を見せた。それにちかが気づいたように声を出す。

「あ、そういえばあやねさんはまだ総一さんに会った事ありませんでしたっけ？」

「そういえばそうだな。確かおとといの朝行人を誘拐しようとしたり、おにごっこですずが投げ飛ばした奴だろ？」

「酷い覚え方だね……」

ちかげの言葉に総一が言うとずは啞然とした様子で呟き、あやねは口元をヒクヒクと引きつらせる。

「失礼な奴ね」

「悪い。改めて俺の名は総一だ、よろしく頼む」

あやねの言葉に総一は軽く会釈をして謝った後名を名乗り、ぺこりと頭を下げる。それにあやねもつられたようにぺこりと頭を下げた。そして頭を上げるとあやねが思い出したように尋ねた。

「そういえば、おにごっこはどうなったのよ？」

「それはですね……」

あやねの問いにちかげが説明を行う、それを聞くとあやねはふうんと頷いた。

「……ふうん、結婚は保留ねえ。ま、確かに行人様やあなたにも相手を選ぶ権利はあるし、私達も悪いことしたわね」

「あやねが元凶な気がするんだけどな……」

あやねは行人を思い出すような表情を見せた後総一をちらりと見てそう続け、うんうんと頷く。それを聞いたさすがそう呟くがあやねは無視してさすが腰に下げている草 薬草を指差した。

「で、行人様に持っていく薬草ってそれ？」

「うん」

「そう」

「！？ 下がれっ！」

あやねの問いにすずは素直に頷き、それを聞いたあやねはニヤリと怪しい笑みを浮かべて懷から何かを取り出す。それに気づいた総一が素早そう叫んで自分もバックステップを踏んだ。

「ていつ！！」

「うにやつ！？」

しかしそれにすずとちかげが反応する前にあやねは着物の袖を口にやりながらその何かを地面に投げ、その辺りは煙に包まれた。

「なんだ！？」

「オホホホホ！！ こいつはいただいて行くわ！！！」

「あ、あやね！？ また痺れ薬！？」

咄嗟にポケットからハンカチを取り出して口にやる。煙が晴れた後あやねはすずから薬草を奪い取りながらそう声を上げ、すずも声を上げる。そしてあやねはウフフと笑いながらすずの背中を向ける。

「おバカさんね、すずって。わざわざ勝利を棒に振って私のために

ちゃんすをくれるとはね」

「もー」

あやねの言葉にすずはケホケホと咳き込みながらそう呟く、とあやねはピューッと走り出した。

「行人様を手厚く看病して高感度あつぷ！！　そして彼は私のトリ・コになるのよー！！」

「おい待て泥棒！」

「あ、大丈夫ですよ」

あやねの言葉に総一がそう叫んで追いかけようとする、が突然ちかげがそう言うと思わず総一は足を止めて彼女の方を見る。彼女は眼鏡をキラーンと怪しく輝かせていた。

「ウフフ、甘いですよ」

「グゲツ！？」

「「！？」」

ちかげがそう言うとはほぼ同時にそんな奇声が聞こえ、二人は声あやねの方を向く。いつの間にかあやねの首に縄が巻きつけられており、その縄の先はちかげのすぐ後ろにある木に縛り付けられていた。

「あやねさんの行動は予想済み。この私を出し抜く事は出来ないで

すの」

「ち、ちかげちゃん、手加減しようよ……」

「な、なんか、むしろあやねが可哀想に見えてきた……よ、良い子も悪い子も真似するなよ……」

ちかげは眼鏡を怪しく輝かせ、怪しく笑いながらそう呟き、それを見たずと総一は啞然とした様子でそう呟く。

それから時間が過ぎ、総一とずとは共に行人の待つずずの家へと向かう。

「わざわざ荷物持ってくれてありがとね」

「ああ、気にするな。行人の様子も見ときたいからそのついでだ」

ずずの言葉に行人はそう返して歩き、家の前にたどり着くと鶏とひよこが出迎えた。

「ただいまーからあげー」

ずずがそう挨拶している後ろに総一も続き、からあげと呼ばれた鶏に何故か会釈をする。その間にずずは玄関の戸を開ける。

「ただいまー行人ー！ 今日は大収穫だったよー。それに、みんながおみまいにつてくだものを……あれ？」

しかしすぐそこに敷かれている布団の中に行人はおらず、ずずは首を傾げて家にかかる。

「おかしいなー、もう治っちゃったのかな？」

「いや、薬もなしにたった一日で全身動かせないほどの筋肉痛が治るとは思えないが……」

さすが首を傾げながら呟くと総一が荷物を下ろしながら返す、と風呂の方から変な声が聞こえてくるのを二人は聞いた。

「風呂か？」

「あ、そうかも」

総一の言葉にすずは頷いてお風呂の方に行き、がらつと戸を開ける。

「おそくなってごめんねー、すぐごはんにするからー……」

「「あ」」

そこにはお風呂に入っているから当然とは言え全身裸の行人ともう一人の女性があり、それを見たすずはゴゴゴというようなオーラを出し始めた。

「行人……どういうこと？」

「え？ いや、その、まちが無理矢理マッサージを……」

「私とは入ってくれないのにまち姉^ねえと……」

「え？」

すずの言葉に行人は慌てて言い訳を始めるがすずはぷるぷると震え

ながらそれを遮る様子でそう言い、それに行人は呆けた声を出す。

「ずるいよ！ 私も入る！」

そしてすずは素早く服を脱ぎ、行人はぶつと鼻血を出す。そしてその後ろにいる総一に目を向けた。

「そ、総一！！ ヘルプ、ヘルプミー！！！！」

「……さて、ちかげの家に行くか」

しかしその総一は行人の声に対し無情にそう言うと言わんばかりに両手を合わせてから家を出て行く。

「ひいいやああー！！！！」

そして孤立無援となった行人の悲鳴が響き渡った。

ちなみに、行人と共に風呂に入っていた女性　まちのマッサージとすずの持ってきた薬草のおかげで筋肉痛はなんとかあったものの、それから行人は貧血で寝込んでしまったそうなの。

第五話 森に行つて、村人交流（後書き）

ふう、ようやくと一卷終了。次回から二巻に入っていきます。

……しかしまあ、書き方が安定しないというか総一のキャラが妙に固定できんな……なんでだ？ 下手だからか？……ま、その内慣れるだろ。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4635w/>

ながされて藍蘭島～もう一人の漂流者～

2011年11月5日13時20分発行